
東方従者録 ~ Little Vampire's Diary ~

東雲 緋那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方従者録 Little Vampires Diary

【Nコード】

N40600

【作者名】

東雲 緋那

【あらすじ】

悪魔の子と忌み嫌われていた少女がいた。

少女はある時、幻想郷へと誘われ、そこで新たな居場所と名前を得た。

これは、紅魔館に新たにやって来た一人の従者な吸血鬼のどこにで

もありそうな、故に大切な日常のお話――

0 話 紅の瞳、紅の従者、紅の館

私の周りはほとんど敵でしかなかった。

皆、私を見るときはまるで忌むべきモノを見るかのような目をして
いた。

私の目――、右は澄んだ緑色なのに左目は血を零したような紅い色

「悪魔の子」、「呪われた子」……………

大人たちはそう言って私を蔑み、時には暴力を振るった。

唯一人、姉さんを除いては。

姉、と言っても血の繋がりはなく、あの人がそう呼んで欲しいと言
ったから、呼んでいた。

皆が忌み嫌う私を嫌がる事もせず、ただ普通の少女と変わりなく接してくれた。

短めの銀色の髪に、見ていると何故だか心の落ち着く………赤い瞳の優しい人。

だがある日、姉さんは殺された。それも、ただ殺されたのではなく複数人の大人たちが姉さんを小屋に連れ込み、拘束する。そして、自分達が満足するまで犯し回した後、殺したのだ。

私が姉さんが連れ去られた事に気付き、小屋に着いた頃にはもう……姉さんは死んでいた。

その時誰かが言った。

「こんな悪魔と関わったばかりに……………なんとも愚かな女だ」
と……………

許せない。

私だけじゃなくて、姉さんまで傷付けたこの大人たちが――

私に、私のセカイに色をつけてくれたあの人を殺した、この腐った人間達が！！

その瞬間、私の頭の中で何かが弾けたような感覚と意識が遠のく感覚を覚えた。

そして、体に力が満ちて来るような感じと、その力の使い方が頭に浮かんできた。

何故、いきなり力を手にしたのか。

何故、その力の使い方が分かったのかは解らない。

でも、そんな事はとうだつて良かった。

私のセカイを奪った人達を消せる力が、手に入ったから……………

再び自らの意識がはつきりとしてきた時に見た光景は、今も忘れられない。

ある人は眼球を抉られ、あの人は四肢をもがれ、ある人は臓物を引きずり出してそれを踏み潰され、またある人は全身の骨が砕け、頭蓋も砕けそこから脳髓をぶちまけて絶命している人達――

私が殺した人達の無惨な死骸で出来た紅い……………紅いセカイだった。

その後私は私が殺した人達の血で汚れた姉さんを綺麗にしてから近くの森に埋めて、あての無い旅にでた。

旅に出てから七年……私は幾度となく人を殺めた。

ある時は賞金稼ぎと名乗った人を、またある時は生きる為に野盗の集落の人々を。

その中で傷も負った。

中には死を覚悟した程の傷もあったが、一日も経てば全て治っていた。

改めて思った

「ああ、私は本当の悪魔になってしまったんだな」と。

ある時、私は目の前に突然現れた裂け目に触れ、どことも知れない場所に降り立った。

何かなんなのか全く解らず途方に暮れていると、前方から一人の間がやって来た。

あの人——姉さんと同じ銀色の髪。

従者が着るといふ衣装を着た人。ただ、姉さんと違うのは、赤い瞳じゃなくて青い瞳な事。

……………まあいい。どうせ、あの人も……………殺さなきゃいけないんだ。

何時からか、私は人を殺める事に抵抗を無くしていた。

……………当然か。だって、今の私は……………

「悪魔……………だから」

一気に踏み込み、放った右拳に彼女は反応しきれていなかった。

が、その次の瞬間目の前から彼女の姿が消えて、私の首筋に冷たい金属の感触を感じた。

ゆっくり振り返ると、そこにはナイフを私の首もとに向けた彼女が立っていた。

ただ、さっきと違うのは青かった瞳が赤色に変わっていたんだ。

姉さんが持っていた……………澄んだ瞳。

私が……………憧れていた瞳に。

私はその後、彼女に何故襲いかかったのか、どうして私がここにいるのかを話した。

話を聞いた彼女——十六夜咲夜いざよい さくやさんは私を自らの主が住まう館に案内すると言った。

その途中、咲夜さんの話を聞いて私は自分に起きた異変について知ることができた。

詳しくは解らないが、私は吸血鬼の血と力に目覚めて、その時に私の内にあつた能力が同時に目覚めたらしいのだ。

吸血鬼、と言ってもその血は人間としての私と入り混じっているらしく、力は本来の吸血鬼に少し劣るが人間の枠を超えた身体能力と再生能力がある。

と、咲夜さんは言っていた。

館に——紅魔館こうまかんへと連れて来られた私は、そのままこの館の主の下へと連れて行かれた。

この後待つ、夢のような出来事に気付かず………

「……どう、でしょうか？レミリアお嬢様、フラン様」

レミリア「中々サマにはなってるわね。ただ、少し表情が固いわよ」

フラン「レフィア」、遊ばーよ」

紅魔館に着いた後、咲夜さんは主であるレミリア・スカーレットお嬢様とその妹様であるフランドル・スカーレット様の下に私を案内し、私の素性を二人に話した。

そして、ここに住まわせて貰えないかと相談した。

なんでも、あのお二人も吸血鬼らしく、私が住むことを快く許してくれた。

メイドとして、咲夜さんと一緒にこの館で働くのを条件に。
私は迷わずその話を引き受けた。

レフィア「今日は今から、咲夜さんにお仕事を色々と教わらないといけませんので……………」

フラン「む……………」

レフィア「ですが、それが済んでからでしたらよろしいですよ？」

フラン「ほんと？」

レフィア「はい」

私はそう言つて、フラン様に笑顔を見せた。

あ、『レフィア』って言うのはフラン様から頂いた私の新しい名前

の事。

私に名前が無いと聞いたフラン様が、一生懸命考えて付けてくれたんだ。

レミリア「あら、ちゃんと笑ったりも出来るのね？」

レフィア「はい……そのようです」

あの時、咲夜さんに出会ってから、どういう訳なのか解らないんだけど少しずつ、一度失った感情が——姉さんと一緒に笑っていた頃の感情が戻ってるの。

レフィア「あ——！咲夜さんを待たせてるんですけど！ではっ！」

私は大慌てで部屋から出て行った。

レフィア「よし………今日から、頑張らなきゃ！」

私に名前と、居場所をくれた幼い主の為に………何より、その出会いのきっかけをくれた人——私のセカイにもう一度色を付けてくれた人のためにもね。

私は大きく深呼吸をして、廊下を歩いていった

■ オリキャラ紹介（前書き）

どうも皆様。

作者の緋那です。

今回は今作の主人公であるレフィアのプロフィールと能力についてです。

では、どうぞ。

■ オリキャラ紹介

名前：レフィア（本名不明）

年齢：18歳くらい

種族：吸血鬼／人間

身長：131cm

体重：不明

髪型：肩より少し長いブロンド混じりの金髪

瞳：右目は緑で左目は紅のオッドアイ

詳細：元々は幻想郷の外の世界にいた少女。幼き頃よりその目を気味悪がられ、忌み嫌われていた。

たった一人の理解者であった姉（と言っても血縁はなく、正しく言うなら義姉）を殺されたのがきっかけで自らの内にあった吸血鬼としての力と能力に目覚める。

レミリアやフランと異なり、純血の吸血鬼ではない（比率的には半人半吸血鬼ぐらいの血の比率）ので身体能力は少々劣る所があるがその分、日光や水などに耐性があり、血も採血しなければいけない

頻度も量も少ない。再生力、寿命はほぼ同じレベル。

能力に目覚め、姉を殺した大人たちを殺した後、彼女は旅に出てその途中、目の前に突然現れた謎の裂け目^{スキマ}に触れて幻想郷へとやって来た。

そしてその後咲夜と出会い、紅魔館でメイドとして暮らす事となり、フランから『レフィア』の名を貰った。

日々メイドとしての仕事に従事しながらパチュリーから学問を、美鈴から体術と気功術を、更に我流で剣術を学んでいる。

従者としてはまだまだ未熟な所が多いが、主への忠誠心は一流。

性格は明るく快活で人懐っこく表情も豊かだが少し抜けてる所もある。

過去の事もあってか年齢不相応に幼い雰囲気（外見、精神的な年齢は10歳前後）を持っている。

以下は能力の説明。

能力：衝波^{しゅつぱ}を操る程度の能力

衝波とは、物体の動きに対して生じる衝撃波の事を指す。

この能力を用いると、拳を前に突き出した時の衝撃を大きくして前方に飛ばしたり、自分の受ける衝撃を減らして打撃系統のダメージを抑えたり、相手に与えた打撃の衝撃を内側に拡散させたりする事

が出来る。

この能力の特徴は、衝撃の“増幅”は自身の制御範囲内ならいくらでも増幅出来るが、自分が受ける衝撃の“減衰”は本来の威力の七割減くらいまでしか出来ない事と、操る衝撃は、その衝撃を発生させた物体の攻撃性質に依存（例えば剣なら“斬戟”と“刺突”、拳なら“打撃”といった具合に）するという点

■ オリキャラ紹介（後書き）

どうも、作者の緋那です。

後書きではその話の追記や次回予告みたいなものやっていくつもりです。

感想、お待ちしております。

次回 『図書館の主たち』

1話 図書館の主たち（前書き）

この作品は、レフィア視点が主になっています。

では、どうぞ。

1話 図書館の主たち

お嬢様とフラン様に改めて挨拶を済ませた後、私は咲夜さんの案内でこの館に住んでいる人達の所にも挨拶に向かった。

レフィア「大きいドア」……………」

咲夜「ここは、この紅魔館の図書館。中には、普通の人間なら一生かかっても読み切れない位の本が保管されているの」

レフィア「そんなに……………」

咲夜「そして、ここにある貴重な書物なんかを勝手に借りていく不届き者もいるのだけだね……………」

レフィア「不届き者？」

どんな人だろう？やっぱ凄く怖い人なのかな？
うーん……………会いたくないなあ……………。

咲夜「まあ、ここで立ち話をしても仕方が無いわ。入りましょ
う?」

レフィア「あ、はい」

私は咲夜さんの後に続いて図書館の中に入った。

レフィア「うわ………」

すごい量の本だなあ………棚が天井ぐらいの高さまである………

私は図書館にある本の多さに呆氣にとられた。

その中ふと、両手に分厚い本を抱えた女の人がフワフワ飛んでいる
のが目に止まった。

その人は私達に気がついたらしく、私達の所まで飛んできた。

??「咲夜さん、お待ちしていました」

咲夜「あら、小悪魔。どうして私達がここに来ることを知っていたの？」

小悪魔「先ほど、お嬢様がパチュリー様に用があると言ってお見えになっていて、色々仰ってましたから」

黒い服に赤い長髪で背中から小さな羽のようなものが生えている女の人——小悪魔と咲夜さんが呼んでいた人はそう言って、私の方をじっと見ていた。

小悪魔「あなたがお嬢様の話していたメイドさんですね？私の事は、“こあ”か“リトル”と呼んでくださいね？」

何だか、ゆったりとした感じの人だな。

レフィア「は、はじめまして。今日からここでメイドとして働く事となりましたレフィアと言います。

こあ………さん？」

こあ（小悪魔）「……「プルプル」……」

あ、あれ？何かおかしかったかな？こあさん、俯いて肩を震わせてるんだけど……

レフィア「あの……何か、変な事でも言いましたか？」

こあ「プフツ………すいません………少し、ツボにつ………」

??「ごめんなさいね。その子、笑いの沸点が少し低いのよ」

こあさんの後ろから現れた人が、少し咳き込みながら言った。
透き通るように白い肌で紫色の髪を腰の辺りまでのばして、パ
ジャマみたいな服装は肌の色と合わさってどこか病弱そうな空気を
出していた。

レフィア「え〜っと……………」

??「ああ、失礼。まだ名前を言ってなかったわね？」

私はパチュリー・ノーレッジ。貴女がレミィの言ってたレフィアって子ね？」

ん？

レフィア「レミィ？」

パチュリー「レミリアの事よ。あの子とは結構な付き合いでね、あだ名のようなモノよ」

私は「なるほど」と、言いながら小さく頷いた。

咲夜「パチュリー様、お嬢様は何と？」

こあ「言ってみましたっけ？」

パチュリー様はこあさんにジト〴〵とした視線を送ってる……………どうしたのかな？

パチュリー「（この子は……………全く）『今日から新たに私に仕えるメイドに、私と同じく誇り高き吸血鬼の血と力をその身に宿すメイド——レフィアにこの私に仕えるに相応しいだけの教養を身に付けさせて欲しい』と言ってたわ。
あと、貴女の事は大方レミィから聞いてるわ」

こあ「あ、そうでした〴〵。で、これがその教本で〴〵す」

こあさんはそう言って、両手で抱えていた本を私に手渡した。

手渡したけど……………

レフィア「あの……………私、姉さんから多少勉強は習っていたんです

けど、単語レベルでの読み書きや簡単な数の計算くらいしか出来ないんですけど……」

パチュリー「……………基本からしっかり教えるから、安心なさいな」

パチュリー様は少し溜息混じりでそう言いました。

1話 図書館の主たち（後書き）

どうも。作者の緋那です。

この作品の小悪魔はおっとり系で少しうっかり屋さんです。

次回 『優秀な門番？』

2話 優秀な門番？（前書き）

出来ました！

感想、お待ちしております。

2話 優秀な門番？

パチュリー様達に挨拶を済ませた私は、図書館を後にして紅魔館の廊下を歩いていた。

レフィア「咲夜さん、今度はどこへ向かっているんですか？」

咲夜「一応、紅魔館の門番をやっている子にも会わせておこうと思
つてね」

レフィア「ん？門番？」

紅魔館に門番さんなんかいたかな？
門の傍でお昼寝してた人はいたけど………

咲夜「……あの寝ていたのが、そうよ」

レフィア「ふえっ！？どうして分かったんですか？」

咲夜「顔に出ていたわよ？」

そうかなあ……？

私は首を傾げたまま咲夜さんの後について行き、一度紅魔館の外に出た。

で………

咲夜「……………」

レフィア「え〜っと……………」

??「く……………」

門の所まで行くと、私が初めてこの館に来た時と同じ位置で寝ている女の人。

立ったまま寝るなんて、器用だな〜

咲夜「……………」トントン↑肩を叩く音「

??「く……………」

咲夜「……………」トントン↑肩を（ry」

??「す……………」

咲夜「……………」トントン↑肩（ry」

??「くか……………」

咲夜「……………」

スッ……………」

咲夜さんはどこからともなくナイフを出して……………」

スコン！！

??「はひい!？」

その人の顔の真横に投げつけた。
投げられたナイフはそのまま後ろの壁に綺麗に刺さった。

??「ほえ?咲夜さん？」

咲夜「また寝てたわね?美鈴^{めいりん}」

咲夜さんは両手を腰に当てて、呆れた感じにその人の名前を呼んだ。

美鈴「あれ?咲夜さん、そっちの女の子は誰ですか？」

レフィア「は、はじめまして。き、今日からメイドとして住ましえて頂く事となったレフィアと言う者でしゅ……」

よ、よろしくお願いしましや……………あう／／／／」

慌てて喋ったら物凄い噛んじゃった……………

私が少し俯いて顔を真っ赤にしていると……………

ポフッ

門番——美鈴さんは私の頭にそつと手を置いて、私の頭をなで始めた。

美鈴「ふふっ、可愛いメイドさんね」
私は紅美鈴^{ほんめいりん}。この紅魔館の門番と庭園の管理をしているの」

美鈴さんは微笑みながらそう言っている間も、私の頭をなで続けていた。

あまり、他人に頭をなでられたりする経験がないからよく分かんないけど。何だかこう……心がポカポカする。

咲夜「美鈴、あなた随分とレフィアが気に入ったみたいね？」

美鈴「あ……こういったちっちゃん子供って、何かこう……保護欲が掻き立てられませんか？」

咲夜「……………ロリオン？」

美鈴「ち、違いますってば……！」

美鈴さんは咲夜さんの言葉を聞いて、すごく慌て始めた。

……ロリ。ンって、どういう意味なのかな？

咲夜「あなたは、知らなくても良いことよ？」

咲夜さんもそう言って、私の頭を少しなでた。

レフィア「あ、あのっ、美鈴さん？」

美鈴「ん？」

レフィア「門番さんって事は、武術も心得てたりするんですか？」

咲夜「居眠りは多いけど、体術の腕前は間違いなく本物よ？」

私の質問に答えたのは咲夜さんだった。

美鈴さんはその隣で気まずそうに笑っている。

美鈴「あははは……。で、それがどうかしたのかな？」

レフィア「その……。私にも体術を教えてもらえないでしょうか？」

美鈴さんは腕組みをして、少し考え込んでから話を続けた。

美鈴「まず、理由を教えてくださいかな？」

美鈴さんの表情が少しだけ真剣なものに変わり、私も表情が変わる。

レフィア「もう、失いたくないんです。

私のセカイを彩っている人は、誰一人として」

そして、私は私の内にあつた気持ちを吐き出すようにそう言った。

すると、美鈴さんは自分の目線を私の目線の高さまで下げて、表情を和らげた。

美鈴「わかったよ。私の教えられる限りの事、全部教えてあげる」

レフィア「ホントですか!？」

美鈴さんはニツコリと笑って頷いた。

その後、私は咲夜さんと一緒に紅魔館の中に戻り、他の大まかな仕事について教えて貰ったあと、約束であったフラン様との遊びに向かった。

そして今、私は自分に割り振られた部屋のベッドに横になって、色々と考え込んでいる。

レフィア「……………（ホント、夢みたいだなあ……………）」

悪魔の子と呼ばれ、忌み嫌われていた私。

姉さんという居場所を——セカイを失った私。

でも、こうして私を必要としてくれる人の下に仕えている。

もしこれが夢でも、出来ればこんな日々がずっと続いてくれますように……

そんな事を考えながら、私はゆっくりと深い眠りにおちていった。

2話 優秀な門番？（後書き）

どうも、緋那です。

改めて言います。

めーりんはロリ。ンではありません！
作者もロリ。ンちゃいますよ！

次回 『めーりんのパーフェクト弹幕教室』

3話 めーりんのパーフェクト弾幕教室（前書き）

出来ました。

感想、お待ちしております。

3話 めーりんのパーフェクト弹幕教室

翌日の早朝、私は美鈴さんから体術を教わる為に、紅魔館の庭にいた。

美鈴「まずは、基本的な知識から教えるわね？」

私は美鈴さんから、こちらの世界——幻想郷でのルールのようなものを教えてもらった。

幻想郷では、『弹幕ごっこ』という遊びのようなものがあり、それは名前の通り互いにお札や針や魔法で作った弾を撃ち合ったり、『スペルカード』という技で勝負をするという内容のものなんだって。

あと、美鈴さんが言うにはコレを創ったのは“ハクレイノミコ”と言う人らしい。

ミコ………猫なのかな？

美鈴「ちなみに私の弾幕はクナイと気弾の二種類よ。まあ、分野は接近戦だから、あまり使わないけどね」

レフィア「あの………気づって、私にも扱えるんですか？」

私がそう聞くと、美鈴さんはポケットから何かを取り出した。

美鈴「気は、大地に生きるもの全てにあるんだよ？センスとかにもよるけど、修行を積みれば大体の人が使えるようなものだよ」

美鈴さんはそう言ってポケットから出した何かを私の掌に置いた。

コレは………

レフィア「指輪？」

手渡されたのは、表面に文字みたいなものが刻まれている銀の指輪だった。

美鈴「それには、身に付けた人の気の制御力やら何やらを高めるおまじないが掛けてあるの。

まずはそれを使って、気の扱い方に慣れてもらおうよ？」

私は美鈴さんの話を聞いてから、その指輪をつけて試しに頭の中でイメージを試してみた。

体全体に気を纏わせる……そんなイメージを。

美鈴「えっ？」

すると、私の体から山吹色の光がゆらゆらとのぼりはじめた。

美鈴「レフィア、一体何をしたの？」

レフィア「とりあえず、全身に気を纏わせるイメージをしたただけなんですけど……………」

美鈴さんはそれを聞くと、すごく驚いたような表情を見せた。

美鈴「これは……………教え甲斐があるわね……………！！」

その後、私は美鈴さんから体術の基礎である体の鍛え方や、気を弾の形にして撃ち出す方法を教わって午前中の時間を過ごした

―咲夜 side―

今日は朝から美鈴が、レフィアに体術を教えると言っていたけど……
……大丈夫かしら？
さっき様子を見に行った時は軽く組み手をしていただけ。

そうね………

咲夜「もう一度様子でも見に行ってみましょうか。でも………」

その前に、この廊下の掃除を終わらせてからね。

レフィア「あつ、咲夜さん」

私が庭まで行くと、レフィアが私の傍まで駆け寄ってきた。

この子は私の中に、亡くしてしまった姉の姿を見ているらしく、私によく懐いている。

咲夜「どう？美鈴。この子は」

美鈴「元々のセンスが良いですね。飲み込みも早いですし、簡単なスペルも自分で編み出しちゃう位ですから。
レフィア、見せてあげて？」

レフィア「はい」

レフィアはサツと身構え――

レフィア「体技『たいぎ潜迅掌せんじんしょう』！！」

ボツ！！

スペル名を言いながら、レフィアが地面に拳を打ち込むと、少し前の地面から山吹色の光が柱のように現れた。

咲夜「スペルとしてのレベルは置いておいて、1日足らずで自分でスペルを編み出せるようになるなんて……………
今後が楽しみね？」

レフィア「えへへ♪」

レフィアは私の方を見ながら屈託のない笑みを見せた。
こうしていると、本当に妹が出来たみたいね。

レフィア「あっ！！パチユリー様からお勉強を教えてもらうんです！
た！

咲夜さん、美鈴さん、それじゃあっ！」

レフィアは大慌てな様子で館の方へと走って行った。

―side―

3話 めーりんのパーフェクト弾幕教室（後書き）

どうも、緋那です。

今回はレフィアのスペル解説を。

体技 『せんじんしょう潜迅掌』

●レフィアが初めて作ったスペル。
拳に力を込めると同時に拳に気を練り上げ、それを地面に打ち込み
地中を這わせて相手の真下からその拳に込めた気を相手に叩きつけ
るスペル。

初めて作ったということもあつてか、複雑さは無く、地上でしか発
動出来ないという欠点があるが威力や奇襲に使うには十分。

次回 『少女勉強中』

4話 少女勉強中（前書き）

出来ました！

感想、お待ちしております

4話 少女勉強中

―【図書館】―

バン！

レフィア「すみません……、遅く……になりました」

私は全速力で館の中を駆け抜け、図書館の扉を勢いよく開けた。

パチュリー「あら、そんなに慌てなくても大丈夫よ？ 私も丁度今、本を読み終えた所だから」

パチュリー様は私に呼吸を整えるように言うてから、手に持っていた本をそっと閉じた。

パチュリー「じゃあ、始めましょうか？」

一時間半後……—

パチュリー「さて、この辺りで少し休憩にしましょう」

レフィア「はうう………」私はペンを置いて、そのまま机の上に体を倒した。

この一時間半、単語レベルの読み書きから初めて、基本的な文章の構成や文法、算数の問題なんかをみ……っちりとやってみました。

こゝ「疲れた時は、甘いものが一番ですよ？」

こゝさんはそう言って、私とパチュリー様の机の上に紅茶の入ったカップを置いた。

レフィア「あ、どうも……」

私はそのカップを手に取り、

パチュリー「あ。気をつけた方……」

中に入っていた紅茶を一気に飲み――

レフィア「ぶふえっ!？」

顔を右に向けて、紅茶を思い切り吹き出した。

パチュリー「リトルの淹れる紅茶は、有り得ない量の砂糖が入っているから一気に飲むのは危険だ、って言おうとしたのだけど……」

レフィア「もう少し早く言って欲しかったです……」

うゝ……口の中にまだお砂糖が残ってる感じがする……
どれだけお砂糖入れたんだろう……？

こあ「美味しいですよに……」

こあさんは不満そうに自分で淹れた紅茶を飲んでいた。
………すっごく美味しそうに。

……って、アレ？

レフィア「パチュリー様は平気なんですか？」

パチュリー「私は、前にそれを飲んだときに軽い眩暈と胸焼け起こして倒れた事があるのよ。

その後、少し“お話し”をして、以来私に出す紅茶には砂糖は入れないように言ってるのよ」

気のせいかな？こあさんの顔が青ざめて、カップを持っている手がカタカタ震えているんだけど……

ギィィ……

ふと、図書館の扉が開き――

レミリア「どう？ちゃんとやっているかしら？」

フラン「レフィア」

お嬢様とフラン様がやって来た。

レミリア「どうかしら？パチエ、この娘は？」

パチュリー「学習能力は群を抜いて優秀なようよ？基礎を覚えれば、ある程度の応用問題も自力で解いてしまうしね」

フラン「レフィアすごい」レミリア「流石は、この私やフランと同じ吸血鬼だけはあるわね」

フラン様は無邪気な笑みを浮かべて、私にお褒めの言葉を下さり、お嬢様はまるで自分の事のように誇らしげに胸を張っていた。

パチュリー「さて、今までの復習を兼ねて簡単なテストをするわよ？」

レフィア「はいっ」

フラン「パチエ、私もやってみたい！
お姉様もやろうよ？」

レミリア「ええ。この館の主たる威厳を魅せてあげるわ！！」

こゝでは、三人分作ってきますから、少し待ってて下さいね？」

こあさんは本を抱えて図書館の奥に行き、暫くすると私たち三人分のテストを作って持ってきた。

更に五十分後、私たちは各々渡されたテストの問題を解き終わり、こあさんとパチュリー様が採点をしている。

パチュリー「……………よし、これで採点は済んだわね」

こあ「ではでは、発表いたしまゝす」

こあさんは解答用紙を持って一人ずつ名前と点数を読み上げていった。

結果は……………

フラン様 241 / 300 点

お嬢様 280 / 300 点

私 291 / 300 点

こゝちなみに、合格ラインは230点以上ですよ」

フラン様はパチュリー様にどこが間違っていたのか（解答を見せてもらったが、応用問題でのミスが目立ってる感じだった）を教えてもらい、お嬢様はと言つと……

レミリア「ぐぬぬ……納得いかないわ！レフィア、もう一度勝負よ……次こそは私のカリスマ溢れる学力を魅せてあげるわ……！」

レフィア「は、はいっ……！」

私に負けたのが悔しかったらしく、もう一回勝負を挑まれた。

そしてこの後、咲夜さんが晩ご飯で呼びに来るまでずっとテスト勝負を続けていました……………。

途中、何回か手を抜いたりしたんですけど何故かバレちゃって、結局お互い全力で勝負をしていたから、晩ご飯の時は二人揃って知恵熱でグッタリしました……

4話 少女勉強中（後書き）

次回 『おつかいレフィア』

5話 おつかいレフィア（前書き）

出来ました！

感想、お待ちしております。

5話 おつかいレフィア

私が紅魔館にやって来てから、もう二週間位経った。

この間に、私は美鈴さんから体術や気の扱い方を、パチュリー様から学問を習う他にも自己流だが剣術も勉強を始めた。

それで今日は朝からお嬢様のお部屋に呼ばれたので、行ってみると部屋にはお嬢様の他に、パチュリー様と咲夜さんがいました。

レミリア「来たわね？パチエ、レフィアにアレを」

お嬢様は椅子に座ったままパチュリー様に目線を向けると、パチュリー様はこちらに歩み寄ってきて、私に一枚の紙を渡した。

パチュリー「今日呼んだのは、咲夜が仕事で少しばかり手が離せそうもないから、代わりに貴女にその地図に書いてある所に行ってもらいたいの。
要はおつかいね」

私はひとまず、パチュリー様から受け取った紙を広げてみた。
紙には、紅魔館の周りの地図が簡単に書かれていて、目的地らしい所の地名に赤い丸印があった。

レフィア「ん」と……………」

確か、この文字は『カンジ』って言って、幻想郷ではよく使われている文字……………だったっけ？

で、読み方は……………」

レフィア「白……………玉……………桜？」

パチュリー「うん。読めてはいるけど、少々惜しいわね？正しくは
はくぎょくろう
白玉桜よ」

レフィア「あ、おつかいとは具体的には何をすれば良いんでしょうか？」

咲夜「このボトルを、白玉桜の主に渡してきて頂戴？」

咲夜はそう言って、私にワインの入ったボトルを渡した。

レフィア「わかりました。では、行って来まゝす」

私はお嬢様に一礼してから一度、自分の部屋に戻った。

―【自室】―

レフィア「ボトルは、このカバンにいれて……っと」

部屋に戻った私は咲夜さんから受け取ったボトルを部屋にあったカバンの中に丁寧にしまい、それを肩にかけるように持った。

レフィア「あとは………」

私はベッドの枕元に置いてあった剣に手を伸ばした。

ちなみに剣は片刃で細身の剣で、居合いにも対応出来るように刀身に少しだけ反りの入っている——『カタナ』って呼ばれる形の剣。

私はそれを腰に差した。

レフィア「よし、準備バッチリ」

私は部屋の窓を開けて、そこから空に向かって飛び出した。

……あ、一応私もちゃんと空を飛べるようになってるんだよ？

のんびり空を飛ぶこと約一時間。

途中で『春ですよー！』と叫びながら弾幕をばらまいて飛ぶ白い妖精さんとの出会い、危うくカバンに弾幕が当たるところだったので急いで離れました。

何だっ たんだろう……………？あの人。

帰ったらパチュリー様に聞いてみようと。

で、更に飛ぶこと二十分後――

レフィア「あ、あの辺りだ」

私は地図を見ながら視線の先にあった淡い桃色の花を咲かせている木が生えている場所を見つけ、そこに降りた。

レフィア「わあ………」

降りるとそこにはずっと上まで続いてる石の階段と、その両側に咲き誇る桜並木があった。

私は初めて見た桜の花に見とれながら、ゆっくりと階段を登っていた。

十分後――

レフィア「結構、長いなあ……………」

全然前に進んでる気がしないよ……………

あ、少し開けた所に出たみたい。

レフィア「ちょっとだけ休憩して……………」

??「何者だ？」

ふと、声がした方を向くと、そこには長さの違う二本の刀を腰から下げた、私より少し背の高い女の子が立っていた。

レフィア「あ、私は――」

??「……………まあ良い」

チャキツ……………

レフィア「えっ？」

その子は私の話を全く聞かずに――

??「この桜観剣ろうかんけんで斬ってみれば判る事だ」

腰から下げていた刀のうち、長い方の刀を抜いた。

レフィア「えっと……………」

この前、図書館で読んだ本にもこんな感じの人が出てたような……………

名前は、確か……………

レフィア「辻斬りさん……………ですか？」

私はカバンをそつと地面に置いて、最低限の臨戦態勢をとった。

5話 おつかいレフィア（後書き）

どうも、作者こと緋那です

次回から少しだけバトル要素が入ります。

次回 『庭師は辻斬り少女！？』

6話 庭師は辻斬り少女！？（前書き）

出来ました！

感想、お待ちしております。

6話 庭師は辻斬り少女！？

レフィアが謎の辻斬り？少女と対峙している一方――

――咲夜 side――

咲夜「お嬢様、紅茶の用意ができました」

レミリア「ん、ありがとう」

イスに座り、読書に勤しんでいたお嬢様は一旦読書の手を休め、私
が淹れてきた紅茶の入ったカップに手を伸ばした。

咲夜「お嬢様」

レミリア「どうかしたの？」

私は、先程から気になっていたことをお嬢様に話してみた。

咲夜「白玉桜の庭師——こんぱくようむ魂魄妖夢の事ですが……………
彼女は侵入者に対してまず、話を聞かずに襲いかかる傾向があります」

レミリア「レフィアが妖夢に襲われていないか、でしょ？」

私は首を縦に振り、話を続けた。

咲夜「妖夢は半人前ながらも、腕はそれなりに立ちます。レフィアがもし、彼女と勝負となったとして、無事で済むかどうか……………」

お嬢様は『ふむ』といった様子で頷き、手に持っていたカップをイスの隣にあつた机の上に置き、私の方を見た。

レミリア「心配ないわ。あの娘^こも、私と同じ誇り高き吸血鬼の血と力をその身に宿す者。

たかだか半人前の庭師風情に負ける道理なんて、どこにも見当たらないわよ?」

お嬢様はそう言って、不敵な笑みを浮かべていた。

—side—

レフィア「だから話を聞いて下さいってばー!!」

妖夢「戦いに言葉など必要ない!!」

それに、貴女の腰に下げている刀は飾りなんですか!?
それ

さっきからあの子の剣を避けながら、どうにか話を聞いて貰おうしてるんだけど、やっぱり全然聞く耳持ってくれないよー!!

あと、あの子の周りにふよふよ浮いてる白いのは何!? 綿あめ?

妖夢「はっ!!」

レフィア「うわぁ!?!」

キン！！

あの子が急に放った突きを、私は鞘から少しだけ抜いた状態の刀で器用にその切っ先を受け止めて――

レフィア「よっと！！」

その突きの勢いを利用して、後ろに跳んで距離をとった。

レフィア「こうなったら……意地でも話を聞いてもらいます！」

私は刀を抜き、鞘を腰に差し直した。

レフィア「剣技………」

そして、刀を持っている右手を肘から直角に曲げてその腕を頭の上に掲げて、左手を右肘の内側からそえるような構えをとり――

レフィア「『ひばしら火柱』……！」

ボツ！！

左手で右腕を弾き出すようにして、勢いをつけて振り下ろした。

妖夢「……！」

ゴォッ！！

あの子が反射的に横に跳んだ瞬間、私の剣から一直線上に三メートル位、地面が斬り抉られた。

妖夢「今の斬撃……それは貴女 능력ですか？」

さっきの斬撃が掠ったのか、そう言う彼女の左腕からは血が出ていた。

レフィア「正解だよ？」

今は私の能力——『衝波を操る程度の能力』を使って、火柱と同じ威力の斬撃を衝撃波にしてとばしたんだ。

妖夢「では……今度はこちらの剣を見せましょう」

あの子は刀を納め、私に向かって一気に殺気を飛ばしてきた。

レフィア「あの構え………居合い!!」

妖夢「遅いつ!!」

私は横に避けようとしたけど、あの子の踏み込みはそれ以上に速く

レフィア「っ……!!」

妖夢「人符『現世斬』!!」

あの子の剣は私の脇腹を切り裂いた。

妖夢「剣伎……………」

更に、あの子は振り向きざまに返す刀で逆側の脇腹も斬り、その瞬間、私の周りに桜の花びらみたいなのが現れて――

妖夢「『桜花閃々』」

その花びら達は四方八方から私を切り裂いた。

レフィア「くっ……………」

この子は間違いなく、私を殺すつもりです私に刀を向けてきてる……。

このままじゃ、絶対に負ける気がする……………。

私も、あの子を殺すつもりで戦わなきゃ……………。

そう……………殺すつもりデ。簡単ナ事だよ……………。

だっテ、抑エテいタ“悪魔”を、吸血鬼ノカラ——

この瞬間^{トキ}だけ、解^{トキ}キ放^{トキ}テバインダカラ。

ドクン……………

その瞬間、私の中で何かの枷^{カギ}が外れるような音^ネがした

6話 庭師は辻斬り少女!? (後書き)

今回はスペル説明とレフィアの補足説明的なのを

・剣技『火柱』ひはしゅう

剣の持ち手の肘をもう片方の手を使って内側から弾いて持ち手を鞭のようにしなせ、更に剣の切っ先に全体重を乗せて威力を上げた斬撃を放つスペル。

レフィアは更にその斬撃を能力を用いて衝撃波として飛ばしている。その性質上、剣の届く間合いで当てると威力が倍になる（剣そのものの衝撃と、飛ばした斬撃の衝撃が同時に当たるから）が、その分刀身に負荷がかかる。

・レフィアの補足説明みたいの

レフィアは普段は吸血鬼としての力を抑えている傾向にある。

理由は咲夜と出会い、かつての感情を取り戻す中で自らの“悪魔”の力である吸血鬼の力を無意識の内に好いものは思っていないため。しかし、彼女自身もう二度と自らのセカイを彩っているヒトを失いたくないと思っているので、使わざるを得ないと思ったらその抑止を解く事になっている。

次回 吸血鬼、レフィア

7話 吸血鬼、レフィア（前書き）

今回はちよっぴり？レフィア無双してます。

全国108億人以上はいるであろう妖夢を愛でる会の皆様、スミマセン。

では、どうぞ

7話 吸血鬼、レフィア

—妖夢 side—

仕留めるまではいかなくとも、手応えはあった。このまま……
…っ!?

何だ……この寒気は……?あの子……からなの?

私が振り返ると、そこにいたのは刀を納めていて、服もボロボロ。
全身傷だらけで血まみれの、立っているのがやっとといった状態の
少女。

だが、その少女からこの異常なまでの殺気が私に向けられている。

レフィア「……………」

ザッ！！

次の瞬間、彼女は横っ飛びで私との間合いを詰めてきた。

妖夢「くっ……………！！」

跳びが短い……………特殊な移動法か！？
なら、その着地の瞬間を……………

カッ！

妖夢「何……………だと……………？」

空中で………加速した！？マズい！
今ので完璧に懐に入り込まれた！！

ドガッ！！

妖夢「がつ………！？」

私は彼女の拳を腹部にマトモに受け、その勢いで後ろに後ずさった。

l s i d e
ア

妖夢「何……だと……？」

やっぱり、この技は初めて見る人は驚くみたいだね。美鈴さんの組み手の時に使った時もそうだったし。

ちなみに今の技は『虎蹴跳』^{こしゅうちょう}といって、横跳びの移動から、着地の寸前に踵を蹴って加速。

その加速で距離を伸ばす少し変わった移動法なの。

ドガッ！

懷に潜り込むと、そのまま右の拳を鳩尾に的確に撃ち込む。体勢こそ崩さなかったけど、彼女はそのまま後ろに後ずさった。

レフィア「まだだよ!!」

私は一気に踏み込み間合いを詰め、すかさず二発の掌底を決め、更に真上に思いつ切り蹴り上げた。

そして、私は蹴り上げた彼女に追いつくように跳び上がり――

レフィア「麗^{れいぎ}伎^{うきぐせ}『浮雲』!!」

空中で器用に一回転して彼女の頭に踵落としを叩き込んだ。

妖夢「ぐあっ!?!」

彼女はそのまま垂直に地面に叩きつけられた。

私は空中に気で足場を創って留まり、再び刀を抜いた。

レフィア「剣技……………」

そして、目の前に大量の気弾を精製して――

レフィア「『落葉』……！……！」

それらを高速の剣で突く。

突かれた気弾は落葉の名前の通り、小さな木の葉のような形に分かれて地面に降り注いだ。

もちろん、ただの気弾じゃないよ？

能力を使って剣の持つ“刺突”と“斬撃”の性質の衝撃を持たせた気弾の雨。

レフィア「……………」

私は無言のまま、地面に降り立った。

妖夢「まだだ……………私は、まだ……………っ!!」

彼女は私以上にボロボロな状態でもなお、刀を構えて闘いの意志を示していた。

レフィア「……………わかったよ。でも、これで最後だよ?」

私も彼女の意志に応えるように体を横に向けて、独特な前傾姿勢を見せた。

レフィア「今から三つ数えて、あなたを斬る」

妖夢「駆け引きの……つもりか？」

ううん。教えてあげただけだよ。

だって………

レフィア「だってあなたじゃ、この剣はかわせない」

妖夢「何……っ!!」

私がそう言つと、彼女の目の色が変わった。
何一つ見逃さない。少しの初動でも見切る、といった空気が伝わってくる。

レフィア「……………」

だけど、私はそれを気にせずに自らが宣言したように数え始めた。

レフィア「三!!」

その一言と同時に私は一気に体を前に倒す。

妖夢「!?!」

そして、顔が地面すれすれの所まで倒したらそこから――

ザッ!!

足の筋力に気の身体強化を上乗せして超加速。
一瞬で彼女の懐に入り込み、一閃。

妖夢「つな……！？」

彼女はその場に崩れるように倒れた。

レフィア「秘剣『紫電閃』………はぁ」

私は少しため息をついて……

妖夢「くっ………」

紫電閃を受けた傷口を押さえながら立ち上がった彼女を見た。

レフィア「さっきのは、わざと少しだけ“抜き”を入れていたとは
言っても………まだやるの？」

妖夢「なめるなあっ!!」

彼女は傷だらけの自分を奮い立たせるように大声を上げて、私に斬
りかかろうとした。

だが――

「?? あらあら妖夢、駄目じゃない? お客様に刀を向けちゃあ」

その剣は、一人の女の人一言で止められた。

7話 吸血鬼、レフィア（後書き）

どうも。辛くない麻婆などただの豆腐だと考えてる緋那です。

最後に出てきた人……………きっと皆さん分かりますよね？

それでは毎度お馴染み？のスペル説明コーナーです。

・虎蹴跳 こじゅうちやうつ

横跳びの移動法の一つで、跳んでから地面に着地する直前に踵を蹴ることで加速。更に移動距離を伸ばす変則的な移動法。

・麗伎 れいぎ 『浮雲 うきぐも』

流れるような所作で左右の手で二発の掌底を当て、二発目を当てる

と同時に相手を真上に蹴り上げ更に自信もそれを追うように跳躍し、空中で踵落としを叩き込む技

・剣技 『落葉』
らくよう

目の前に大量の気弾を展開し、それらを高速の乱れ突きで一気に突く。

突かれた気弾はレフィア的能力で斬撃と刺突の性質の衝撃を帯び、木の葉のような形に分裂して発射される。

見た目的には咲夜さん（作者の嫁）のスペル、奇術 『エターナルミーク』のそれに近い。

・秘剣 『紫電閃』
しでんせん

前傾姿勢から脱力による落下で体を地面ギリギリの所まで倒して加速をつけ、そこから足の筋力による加速で爆発的な加速を生み出し、相手との間合いを瞬時に詰めて加速に更に全体重を乗せた一閃で相手を斬り伏せる技。

レフィアは吸血鬼としての高い身体能力に気功術による身体強化を上乗せしているのでその速さは折り紙付き。

欠点は技の終わりに生じるスキが大きいので、一対多の勝負では使えない事。

次回 『ともだち』

8話　ともだち（前書き）

出来ました！

感想、お待ちしております。

8話　ともだち

??「ごめんなさいね。妖夢がいきなり襲いかかったちゃって」

その後私はあの女の人——白玉桜の主人である西行寺幽々子^{さいぎょうじ ゆうこ}さんに白玉桜の中に案内されて、さっきの女の子——妖夢が私に刀を向けたことを謝らせて欲しいと言った。

レフィア「いえ、私もお嬢様より幽々子さんに渡すように言われたワインのボトルを割ってしまいましたし……………」

そう、実はさっきの戦いの時に私の落葉の流れ弾がカバンに当たっちゃって、ボトルが割れちゃったんだよね……………」

とりあえず、今はさっきの戦いで妖夢が負った（私が負わせた）傷を氣功術を応用して創った治癒術で治してる。
私の方の傷は脇腹の傷以外は大体治っていて、脇腹のは少し深かったから、傷薬と包帯を借りて処置を済ませた。

レフィア「……よし。これでおしまい、っと」

私は妖夢の傷が全部ちゃんと塞がったのを確認してから、術を解いた。

妖夢「あの、私からも剣を向けた非礼を詫びさせて下さい。傷まで治していただいて……」

レフィア「ううん。私も妖夢に刀を向けて、お互いに傷つけあった

んだからこれでおあいこだよ？

あと、敬語は出来ればやめて欲しいんだけど……………」

妖夢「ダメです！貴方は客人、客人にそんな無礼な振る舞い……………」
……」

むう……………妖夢って結構頭、固いのかな？

……………そうだ！！

レフィア「じゃあ、友達ならいいよね？」

妖夢「ほえ？」

レフィア「私、妖夢と友達になりたい。
……ダメ？」

妖夢「あつと……え〜つと……」

ん？妖夢、あたふたしただしだけど、どうしたのかな？

幽々子「良いじゃないの？妖夢。
その子は悪い子、という訳でもないみたいだし、ただ純粹にあなた
と友達になりたいだけみたいよ？」

その様子に見かねた幽々子さんが、妖夢に助け舟を出した。

妖夢「名前……は？」

レフィア「レフィア♪」

私はニコツと笑って右手を前に出した。

妖夢「レフィア……うん、覚えた。
じゃあ……その、よろしくね？」

レフィア「うんっ♪」

妖夢はどこかきこちない感じでその手をとった。

幽々子「レフィアちゃん、コレをレミリアちゃんに渡して貰える？
元々は、あのワインと交換だったんだけどね」

幽々子さんはそう言って、私に一つの紙袋を手渡した

ぐう………

レフィア「あう………／／／／」

色々と気が抜けたら、お腹鳴っちゃった………

幽々子「あらあら？良かったらウチでお昼ご飯、食べてく？」

私は顔を真っ赤にして、小さくコクンと頷いた。

で、私は白玉桜でお昼ご飯を食べてく事になったんだけど……

レフィア「わあ………」

幽々子「ようむう、おかわりはまだかしら？」

幽々子さんがご飯をすっごくたくさん食べるのにビックリしました
！！

妖夢「はいっ、すぐにお持ちします！」

妖夢は妖夢で慣れた感じで調理場とここを行ったり来たり……………
お昼を食べ終わった後、私は妖夢と少しおしゃべりしてから、紅魔館に戻る事にしました。

幽々子「また、いつでも遊びにいらっしやいね？」

レフィア「はい、妖夢、今度は紅魔館に遊びに来てね？」

妖夢「うん」

紅魔館に着いた頃には、もうお日様が沈みかかっていました。

レミリア「少し、遅かったわね？それにそのボロボロな格好……何かあったの？」

紅魔館に着いた後、私はお嬢様に幽々子さんから受け取った紙袋を渡しに行った。

レフィア「ちょっと、向こうで色々ありまして……………。
あと、幽々子さんからコレをお嬢様に渡すようにと」

私はそう言っ、手に持っていた紙袋をお嬢様に手渡した。

レミリア「で、どうだった？白玉桜は」

お嬢様の問いかけに――

レフィア「庭師さんと友達になりました♪」

満面の笑みでそう答えた。

8話　ともだち（後書き）

今回はスペルではありませんが、作中でレフィアが使っていた治癒術についての説明を

・活命功かつみょうこう

レフィアが創った治癒系の気功術。
仕組みはまず、レフィアの持つ吸血鬼特有の再生回復能力を気功術で活性化させる。そして、治したい相手に自身の手を介して相手にそれを送り込む事で、相手の自己回復能力を一時的にだが高めることで傷を癒やす術。

難点は術の形式上、レフィアの回復能力を一時相手に持たせているので、術の発動中はレフィアの再生回復能力が大幅に下がってしまう（大体普通の人間が持つそれよりも少し劣る位まで下がる）点。

9話 ミコ[≠]猫（前書き）

お待たせしました！

感想、お待ちしております。

9話 ミコ[≠]猫

白玉桜におつかいに行った翌日、私はお嬢様と一緒に出かけます。

レフィア「あの、お嬢様？今日はどちらへ向かわれてるんですか？」

レミリア「私の友人が住んでいる神社へ、ね。
あの子に貴女を会わせるのもかねてよ」

お嬢様はどこか楽しそうにそう言いました。

レフィア「もう一つ、質問なんですけど……………」

レミリア「どうかしたの？」

レフィア「お嬢様も、吸血鬼なんですよ？
日の光は平気なんですか？」

さつきから平然と歩いてるけど……

レミリア「ふふつ、伊達に五百年も生きている訳じゃあないのよ？
吸血鬼の弱点なんか、今の私やフランからすれば無きに等しいモノ
よ。まあ、強いて言うなら長い間日光に当たり続けていると、気分
が悪くなる位かしらね」

ほえ………流石お嬢様だなあ。

まあ、こんな感じでのんびり歩き続けて私達は赤い門みたいなものと、その奥に木でできた建物がある所まで来ました。

レミリア「ここが、はぐれい博麗神社よ」

ん？博麗？

どこかで聞いたような………

建物の近くまで歩いて行くと、中から女の人が出てきました。

??「あら、レミリア。あんたが咲夜を連れずに来るなんて珍しいわね？」

そっちのメイド服の子と関係があるの?」

レミリア「ええ、れいむ霊夢。今日は最近ウチで働くことになった新しいメイドの紹介も兼ねて、こっちでお茶にしようと思ったのよ。
レフィア? 霊夢に挨拶を」

レフィア「はじめまして。レフィアと言います」

霊夢「私は博麗^{はくれい}霊夢^{れいむ}。幻想郷^{こくそう}じゃあ、『博麗の巫女』の名前の方が有名かしらね。よろしくね?」

あー！思い出した！！
前に美鈴さんがいつてた『ハクレイノミコ』って、霊夢さんの事だったんだ！

……猫じゃなかったんだね。

霊夢「今、何か失礼な事考えなかった？
……まあいいわ。とりあえず、あがりなさい?」

私達は霊夢さんに連れられて、建物の中に入って行きました。

霊夢「ふうん、って事はあんたも吸血鬼なのね？」

レフィア「はい。正確には、人間と吸血鬼の血が混ざってるってパチュリー様が言っていました」

レミリア「少し前に、咲夜に拾われてウチに来たのよ」

私達は霊夢さんと一緒に客間でお茶を飲みながら、私の事を色々と話していました。

ゴト…………

レフィア「ん？」

何だろ？今の音——

三人「……………」

私達の視線の先………というか、縁側にはその光景にはすぐく不自然なダンボールがありました。

レフィア「なんで？」

確かダンボールは、敵の目を欺く為の道具だって、図書館で読んだ本に書いてあったけど………

霊夢「アイツめ………まゝた変なこと吹き込んだわね？」

霊夢さんは呆れ顔でそのダンボールに近付いて――

霊夢「よつと――！」

スパーン――！

器用にダンボールだけを外に蹴っ飛ばしました。

??「！」

ダンボールの中にいたのは水色の髪の子供な女の子。

背中から、水晶みたいなキレイな羽みたいなのが生えてました。

??「ちえつ、バレたか」

霊夢「やるんなら、もっと気配と物音の消し方をマシにしなさいよ」

??「何だソレ？」

霊夢「……………あんたに言った私が間違いだっただわ」

霊夢さんと仲良く話してるけど、知り合いなのかな？

レミリア「で？貴女は何をしに来たのかしら？チルノ」

チルノ「おお、レミリアもいたのか。
ん？隣はだれだ？」

女の子——チルノは私の方に興味を持ったのか、じつと私の顔を見ている。

レフィア「私はレフィア。よろしくね？チルノ」

チルノ「あたいはチルノ！すっごい最強なんだぞ？」

チルノはそう言って、えへんと胸をはった。

霊夢「話がそれちゃったけど、チルノは何しにきたの？」

チルノ「ヒマだから遊びにきた！！」

チルノは満面の笑みで霊夢さんにそう言った。

霊夢「ま、お茶位なら出すから適当にゆっくりしてきなさいよ?」

そうしてチルノも入れた四人で、夕方までのんびりお話しました。

9話 ミコ[≠]猫（後書き）

次回 『白黒魔法少女』

10話 白黒魔法少女（前書き）

タイトルからして誰が出るかモロバレな10話、始まります。

10話 白黒魔法少女

私が霊夢さんの家に行った2日後

【図書館】

パチュリー「……で、ここで出た値をこっちの式に代入して α の式を成立させると、 β の式に代入しないといけない値が求まるから……」

レフィア「ふにゅ……」

いつものように、パチュリー様に勉強を教わってるんだけど……

レフィア（うゝん……何か頭、ぼーっとする……）

風邪でもひいたかな……？

パチュリー「……こうすると、この式全体で求めてる値が出る」

ガッシャーン！！

二人「！？」

突然、窓ガラスが割れて――

パチュリー」「……………いい加減、玄関から入るか開いている窓から入ってくるって来るといふ事を覚えて欲しいね？」

??「仕方ないだろ？玄関まで回るの面倒だし、突っ込む窓に限って開いてないんだからさ」

白と黒の服を着て、簾にまたがった女の子が入って来ました。

その格好は、いつか姉さんが読んでくれたお話に出てきた魔法使いの女の子にそっくりでした。

??「お？お前が霊夢の言ってたちっこい吸血鬼メイドか？」

え？霊夢さんの知り合い？

レフィア「そう……ですけど？」

私がそう言った途端――

ガシッ

レフィア「ほえ？」

その人は私をバッグを腋に抱えるみたいに抱えて――

??「ちよつと借りてくぜ!」

パチュリー「ちよつ、待つて……………」

ギューン!!

レフィア「きゃああああゝ!?!」

どこかに連れ去られました……………

【??.?】

??「よし、到ちやく……………って大丈夫か?」

レフィア「き、気持ち悪い……………」

だってあの筈、すつごく速かったんだもん……………。

うえ……………吐きそう……………。

レフィア「あの……あなたは？」

??「ん？そー言えばまだ名乗ってなかったっけな。私は魔理沙、
霧雨^{きりさめ}魔理沙^{まじな}だ。
ついでに言つとくところは私の家だ」

レフィア「あ、私はレフィアと言います……………」

魔理沙「あゝ、タメ口調で良いぜ？敬語使われて話されると、どうもむず痒いんだ」

魔理沙は帽子を取って、頭をかきながらそう言った。

レフィア「あ、はい……………」
じゃなくて、うん。わかったよ魔理沙。それで、どうして私を連れてきたの？」

魔理沙「霊夢から聞いたんだけどさ、レフィアは元々人間だったんだろ？どうして吸血鬼になったのか、ちよいと気になってさ。もしかすると、新しい魔法の開発材料になるかと思ってな」

ドクン……………

レフィア（あ……………もしかして、私の体の異変って……………私の中の吸血鬼の血が……………血を求めて……………？）

そっだ……。よく考えてみれば私、幻想郷^{こく}にきてから一度も血を口にしてなかったんだっけ……

前まで血に飢えることなんて、気にしてもなかったから……

レフィア「ねえ……魔理沙……？」

魔理沙「ん？あ、こんなトコで話してるのもアレだし、ウチに入ってから話そっぜ？」

私は魔理沙に連れられて、魔理沙の家に上がった。

レフィア「うわぁ……………」

魔理沙「まあ、少しばかり散らかってるが、適当にくつろいでくれ」

これで少し！？本とかメモとか変なキノコとか訳のわかんないモノが大量に転がってて、足の踏み場探すのが難しいよ！？

魔理沙「で、さっきは何を言おうとしてたんだ？」

魔理沙は帽子と簪を近くの壁に引っ掛けながら、隣にあった本の山からイスを引っぱり出して座った。

レフィア「その……………少しだけでいいから魔理沙の血、吸わせて欲しいの……………」

魔理沙「は？」

レフィア「ダメ……………？」

私は魔理沙の顔を下からのぞき込むような感じで魔理沙の方を見た。

魔理沙「（くっ……涙目と上目遣いのコンボ……だと！？）……
…別に良いけどその代わり、レフィアの事、話せる範囲だけでもい
いから話してくれよ？」

魔理沙は自分の服を首元の辺りだけはだけさせた。

レフィア「うん………」

私は魔理沙の首元に顔を近付けて――

レフィア「んっ……………」

魔理沙「…いつ……………」

牙を少しだけ突き立てて、そこから流れ出る血を吸っていく。

レフィア（ああ……………何だろう……………）

体が楽になってく……………気持ち良い……………♪

フラッ……………

魔理沙「お？」

レフィア「ふえ……？」

ドサッ

ふとした拍子に私は体勢を崩しちゃって、魔理沙も巻き込んでその場に倒れた。
しかも………

ガチャッ

そのタイミングで誰か来ちゃった……………。

??「魔理沙?この前借りた本、返しにきた……………わ……………よ?」

あ、言い忘れてた。

今の私と魔理沙の状態は、私が仰向けに倒れてその上から魔理沙が覆いかぶさる感じに倒れてるの。

??「え〜つと……………こ、こゆっくり……………」

ボタン!!

魔理沙「待て、アリス!!!誤解だ!!!戻ってこい!!!
カームブワァーック!!!」

バン！！

魔理沙は大慌てで叫びながら箒を片手にさっきの人を追いかけて行った。

顔、見えなかったけど誰だったんだろう………？

10話 白黒魔法少女（後書き）

今回はアリス、済まないWW

オチ担当みたいになってしまった……

次回はちゃんと出ますから……。

次回 『勘違いは良くないと思います』

11話 勘違いは良くないと思います(前書き)

まさかの1日2話更新！

なぜか？

空いてる時間が多かったからです。

では、どうぞ

11話 勘違いは良くないと思います

十分くらいすると、魔理沙がさっきの人を連れて戻ってきた。

??「さっきは勘違いして、ごめんね？」

わたしはアリス。アリス・マーガトロイド、魔理沙と同じで魔法使いよ」

金色のショートカットに青い瞳の女の人——アリスさんはそう言
って、私に頭を下げた。

レフィア「私はレフィア、紅魔館のメイドです。あの、魔法ってど
んな魔法なんですか？」

アリス「まあ、一口に魔法と言っても色々な分類が出来るけど、私

が得意なのは……………」

アリスさんはどこからともなく人形を取り出して――

レフィア「わあ……………」

それを宙に浮かせた。

アリス「こういった人形操作系の魔法が得意ね。
ちなみに魔理沙は火力の高い魔法が専門よ」

魔理沙「やっぱ魔砲って言えば、派手でパワーがなくっちゃな」

ん？ “法” の字が違うような……………

あ、そうだ。

レフィア「魔理沙、約束通り私の事、話すよ。私がわかる範囲でだけど……………」

魔理沙が私の方を向いたのを確認してから、私は私の過去の事を――私が悪魔の子と忌み嫌われていた事、

ただ一人の肉親とも言えた姉さんの死がきっかけで吸血鬼の力と、私の能力に目覚めた事、

そしてある日、変な裂け目に触れて幻想郷^{こゝ}にやって来た事を全て話した。

レフィア「これが、私が幻想郷^{ユリ}に来るまでの事^{コト}だけど………」

私はふと、二人の方を見て固まった。

いや、正しくはアリスさんの様子を見て固まった。

魔理沙は喋らせて申し訳なさそうに顔をしかめて、アリスさんは……
………

アリス「ぐすっ…………レフィア、色々と辛かったんだね…………
ひっぐ…………」

もう、これでもかー！！ってくらい泣いてます。しかも片手のハン
カチだけじゃなくて、人形にもハンカチ持たせて涙を拭かせてるの。

魔理沙「よし！わざわざこんな話し辛い事を話させちまった代わり
に、面白い物を見せてやるぜ！！」

魔理沙はそう言って勢いよく家の奥に入って行っちゃった……………

ドタン！！ ガシャン！！

ボタン！！ \ピチューンノ

な、何？今の物音（？）は……………

魔理沙「あゝ……………少しは家の中、片付けないとな……………」

魔理沙はほこりまみれになって家の奥から出てきた。

その手には、小さな木箱が抱えられていた。

魔理沙「ずっと前に変態……じゃなかった。こーりんのトコから
かっぱらってきたマジックアイテムなんだが、使い方が全く分かん
ないんだよね」

そう言って、魔理沙は木箱を開けた。

木箱の中には五色の石が埋め込まれたブレスレットみたいなものが
入っていた。

魔理沙「名前は……たしか、五行環ごぎょうかんだったけな。
結構キレイだろ？」

レフィア「んん？これって……」

文字、かな？石の周りに彫ってあるの。

あれ？この文字……………

レフィア「私が着けてる指輪のとそっくりだ」

魔理沙「え？」

私は魔理沙に左手の人差し指に着けていた指輪を外して、魔理沙に手渡した。

魔理沙「おお、ホントだ。この指輪の能力って一体、なんなんだ？」

レフィア「えっと……身に着けた人の気の制御を高めるおまじないをしてあるって、美鈴さんが言ってた」

魔理沙「ふん、そのまじないってのがこの文字による術式だと仮定すると……コレも同じタイプのアイテムって事か？」

魔理沙は右手をアゴに当てて考え込みながら、私に指輪を返した。

レフィア「あ、だったら私が試してみよっか？」

私がそう提案すると、魔理沙は私に五行環を手渡した。

私は指輪を左手に着け戻し、五行環は右手に着け、右手に気を集中させてみた。

キィィン……………

三人「えっ？」

すると突然、五行環に付いていた石が光り出して、右手に集中させていた気が、砂と金属みたいな物に変化した。

レフィア「もしかして……………」

これって、私の意思で使えるのかな？よし……………

私は両手を地面に当てて、頭の中で土の柱と鉄の柱をイメージしてみた……………

ズンー！！

レフィア「おお………」

すると、見事に目の前に二本の柱が現れた。

魔理沙「なるほど……そう言う事か」

アリス「どういうことなの？」

魔理沙「多分、アレは身に着けた人が持つてる五行の性質………つかどこんすい木^も
火土金水だっけか？」

それを具現化させる能力を持っている………んだと思う」

レフィア「じゃあ、私が持つてるのはその五行の内、土と金って事？」

魔理沙「ああ。恐らくその力をちゃんと使えるようになれば、ソレ着けなくても使えるハズだぜ」

アゴに手を当てたまま、魔理沙は憶測論を続けた。

アリス「そう言えば、魔理沙がそれを貰ってきた時にわたしや魔理沙、ついでにその場に居合わせた霊夢も着けてみたけど、なにも起きなかったわよね？」

魔理沙「ソコがあんまり解ないんだよな。ただ私達が五行の性質を持っていなかったか、はたまた別の理由か……………」

レフィア「後で消せるか試してみよつと……………
え、いいの？貰っちゃっても」

魔理沙「ああ。こういったアイテムは、使える奴が持っていた方が
良いからな」

レフィア「うん！ありがとう、魔理沙！」

私が笑顔でそう言うと、魔理沙とアリスさんが円陣組んでひそひそ
話を始めちゃいました。

何を話してるんだろう……………？

魔理沙（おい、あの笑顔の威力おかしくないか！？）

アリス（ええ、わかるわ。しかも背も低くて、体も細いし……何か
こう、守りたくなる感じがするわよね）

その後、私は魔理沙達と別れて紅魔館に戻りました。
紅魔館に着く頃には日も暮れ始めていました。

門の所まで行くと、丁度美鈴さんに呼び止められました。

美鈴「ねえ、レフィア」

レフィア「はい？」

美鈴「今日、調子悪かったのって、もしかしなくても吸血鬼がらみの事でしょ？」

うう……今朝の練習の時も足元フラついていたの、バレてたんだ……

レフィア「はい……………」。

あ、今は大丈夫ですよ？魔理沙から少しだけ血を吸わせてもらえましたから」

美鈴「その事で、咲夜さんから話があつてね、

今度から血に飢えるような事があつたら、私に言つてね？」

レフィア「えっ？でも……………」

ポフッ

咲夜「あなたは、ここに仕えるメイドであり、家族でもあるのよ？
家族が困ってるなら、それを助けない道理はないわよ？」

ふと、咲夜さんがやって来て私の頭を優しく撫でながら、私を諭すようにそう言った。

家族……………？私、も……………？

あれ……………？おつかしいな……………？

レフィア「なみ……………ぐすつ、涙……………止まんないよ……………？
涙って……………ひっぐ、悲しい時に……………出るんじゃないの……………
」

咲夜「…………嬉しくても、涙は出るものなのよ？ “嬉し泣き” って言うんだけどね」

咲夜さんはそう言って、私の顔を胸元にうずめるように、そっと抱き寄せた。

咲夜「そういう時は……………思いつ切り泣いておきなさい」

レフィア「ふえっ……………咲夜……………さぁん……………」

私は咲夜さんの腕の中で思い切り泣いて、そのままゆっくりと自分の意識を手放していった。

美鈴「ふふっ…………泣き疲れて、寝ちゃったんですね」

咲夜「子どもの内は、これでいいのよ？
思いつ切り笑って、思いつ切り泣いて、ね」

咲夜さん達のそんな会話が、手放す直前の意識の中で聞こえたような気がした……………

11話 勘違いは良くないと思います（後書き）

今回は作中で登場したマジックアイテムと、レフィアの新たな能力について

・五行環ごぎょうかん

作中では魔理沙は『身に着けた人の性質を五行の性質として具現化する物』と考えていたが、正しくは『身に着けた人の性質を五行の性質の“気質”として発現する物』。

つまり、魔理沙達が使っても何も起きなかったのは、かつての天子による異変によって魔理沙達の気質が“天候”として定着していた為。

・土金つちがねを操る程度の能力

レフィアが五行環の力で新たに身に着けた能力。

単純に言えばパチュリーの能力から日月木火水を抜いただけだが、

パチュリーのは自然界にある物質や自分の魔力にその性質を付与して使役するものとするなら、レフィアのは自然界にある物質を使役したりするのは変わらないが、自分の気を用いて自分の気質を自らの意思で具現化・使役を行えるのが唯一の違い。

なお、後者によって具現化した土や金属は自らの気質によって構築されているので『気質を断つ』能力を持つ緋想の剣とは相性が悪い。

次回 『お泊まりin白玉桜〜境界に住まう者〜』

12話 お泊まりinn白玉桜く境界に住まう者く（前書き）

出来ました！

今回から数話は、お泊まりinn白玉桜編？です！

では！

12話 お泊まりinn白玉桜く境界に住まう者く

魔理沙とアリスさんと出会ってから数日後、咲夜さんから少しの間だけお休みが貰えたので、折角だから白玉桜に泊まり込みで遊びに行こうと思います♪

――side 妖夢――

妖夢「ふう……毎度の事ながら、自分でもよくやると思っな……」

この階段の掃き掃除、長さもだが何より周囲の桜のお陰で掃いたそばからまた花弁が落ちてくる。

掃いても掃いてもキリがないな……

キィィーーン……

「?？」きゃああああゝ!？」

ん？何だろう、今の悲鳴と音は……

レフィア「だゝれゝかゝとゝめゝてゝゝ!！」

ってレフィア!？何で猛スピードでこっちに飛んで来てるの!？

私はとっさにその場から離れたが――

ズガアアアン！！

その直後、レフィアは私がそれまでいた位置に突っ込んで大きな音と土煙を巻き起こした。

妖夢「レフィア、大丈夫……………」

レフィア「……………！！〔ジタバタ〕」

土煙が晴れてから私が見たのは、斜めに地面（階段）に突き刺さったような状態で上半身が完全に埋まって足をじたばたさせているレフィアの姿だった……………

よく見ると、何故かカバンまで地面に刺さってる……………

一体何で出来てるの……？

—side—

レフィア「うん………思いつきだけで変なコトって、しない方がいいね………」

妖夢「そ、そうだね……（汗）」

魔理沙の真似して、思いつ切り速く飛んだまでは良かったんだけど、コントロール出来なくなっちゃってね……

地面に当たる寸前に五行環の力で全身に金属の力を纏わせて、体を硬くして、更に私の能力で衝撃を抑えたんだけど、“勢い”までは抑えられなくて、結局地面にぶつかって妖夢に引っ張って貰っちゃったし。

妖夢「それで、今日はどうしたの？お使い？」

レフィア「ううん、今日は妖夢のトコに泊まるうと思ってきたの」

妖夢「……………え？」

ん？なんで妖夢、そんなにポカーンとした顔してるの？

妖夢「と、とりあえず、まずは幽々子様に話を聞いてみないと……」

ああ、そう言えば何も連絡とかなしに来ちゃったんだもんね、私。

私と妖夢は駆け足で階段を登って、白玉桜に向かった。

【白玉桜】

私達が白玉桜に着いて、真っ先に幽々子さんの所へ行くと――

??「あら、見慣れない可愛いお客様ね?」

長い金色の髪に、紫色のドレスみたいな服を着た女の人と狐みたい

な耳の生えた帽子と、ふさふさした尻尾の生えた短い金髪の女の人と、私より少し背の低くて猫の耳が生えた女の子の三人組がいました。

幽々子「あら、レフィアちゃん。いらっしやい」

レフィア「はい」あの……そちらの人達は？」

私とその三人の方を向くと、真ん中に座っていた女の人がそれに気付いたように言葉を繋いだ。

??「私は八雲紫^{やくも ゆかり}。幽々子の昔からの友人よ」

??「私は、八雲藍^{やくもらん}。主である紫様に仕える式神さ。こっちの少女は橙^{ちえん}。私と同じ式神だ」

橙「藍様が紹介しちゃったけど一応、私からも改めて自己紹介させてもらうね？」

私は橙。私も紫様に仕えてるんだけど、式としての主は藍様なんだ。だから、式神の式神ってややこしい肩書きなんだけどね」

レフィア「紫さん、藍さん、橙、ね。私はレフィア、紅魔館にお仕えているメイドです」

私も三人に簡単にだけど、自己紹介をした。

紫「あら、そんなにかしこまらなくてもいいのよ？ 気軽にゆかりんども呼んでくれればいいわよ」

レフィア「あ、はい。ゆかりん……さん？」

ズコーッ！！

あ、あれ？ 私、何かおかしい事言っただかな？
どうして皆倒れてるの？

幽々子「これは……予想の斜め上すぎるわ……」

妖夢「レフィアって、天然入ってるの？」

紫「あ、やっぱり紫さんと呼んでくれないかしら……？」

と、ゆか……じゃなくて、紫さんは苦笑いしながら言いました。

幽々子「そう言えばレフィアちゃん、今日はどうしたの？」

あ、忘れてた。

私は今日、白玉桜に来た理由を幽々子さんに話した。

紫「良いんじゃないの？賑やかなのは大歓迎でしょう？」

幽々子「ええ」

ちよつとだけ、家事のお手伝いなんかを頼んじゃうけど、それでも良いかしら？」

レフィア「はい」家事なら、お任せです」

私はニコツと笑って、幽々子さんに返事をした。

橙「よし、レフィア………だっけ？まずは私と弾幕ごっこでもし
よう？」

レフィア「うん、良いよ？」

私と橙は元気よく庭に飛び出した。

12話 お泊まりin白玉桜〜境界に住まう者〜（後書き）

次回 『お泊まりin白玉桜〜其の動き、イカツチ雷電の如く〜』

13話 お泊まりin白玉桜の動き、雷電（イカツチ）の如く（前書き）

出来ました！

明日はお休みなので、一挙二話更新予定！？

ではー！どつぞ。

13話 お泊まりin白玉桜く其の動き、雷電（イカツチ）の如く

紫「藍、貴女はどちらが勝つと思う？」

藍「橙ですね。家族を応援しない訳にはいけませんよ」

幽々子「妖夢は？」

妖夢「レフィアですね。一度、手合わせはしてますからその実力は身を持って知っていますから」

他の四人は縁側に座って、私達のどちらが勝つのかを予想していた。

橙「それじゃ、準備はいいかな？」

レフィア「いつでもいいよ？」

私と橙はある程度距離をとって、お互いの出方をみていた。

レフィア（うーん……………）

この間合い、紫電閃や虎蹴跳で一気に詰めて攻めるには少し遠いな
……

よし、ここは……………

橙「レフィアが来ないなら、こっちから!!」

バババババツツ!!

痺れを切らしたように、橙が弾幕を展開してくる。

レフィア「おっと!!」

私も気弾を一気に生成して撃ちだし、橙の弾幕を一つずつ撃ち落としていく。

橙（かかった！！）

橙はこれを機にといった感じに弾幕の隙間をすり抜けるように私目掛けて突っ込んできた。

でも……………

レフィア「私の狙いはコレだよ！！」

ブン！

橙「うわっ!？」

私は殴りかかってきた橙の右腕を掴んで、その勢いを利用して投げ飛ばした。

でも、橙はすぐさま体勢を立て直した。

レフィア（入った……!!）

“アレ”の……『三步の間合い』!!

私は刀を抜きながら、橙の斜め前に移動した。

レフィア「秘剣……………」

— 橙 side —

ふう…………いきなり投げられたのはビックリしたけど、流石に妖夢に勝つだけはあるね。気を引き締めなきゃ！

レフィア「秘剣……………」

レフィアは体を前に倒しながら、私の左斜め前に移動してきた。

橙「お！？でも、この速さなら……………」

ザッ！！

橙「えっ！？」

き、消え……………

ピタッ……………

レフィア「『なるかみ鳴神』」

次の瞬間、レフィアの声と共に私の首筋に冷たい金属の感触がした

—side—

紫「勝負あり、ね」

紫さんの声が沈黙を破り、私は刀を納めた。

橙「ふえ〜…………レフィア、強いなあ〜」

妖夢「レフィア、今の技は一体……………」

橙はその場に座り込んだのと同時に、妖夢が傍に駆け寄ってきた。

レフィア「今の技……………鳴神はね、ヒトの目の仕組みを利用したような技なんだよ。」

その為に、普通の剣術じゃ少し遠い『三步の間合い』が必要になるの」

妖夢「三步の間合い？」

橙「三步の間合い？」

もう一度、見せた方が手っ取り早いかな？それじゃ……………

レフィア「よっ………と!」

ズズン!

私は地面に両手を当てて、目の前に土の柱を創った。そして、さつきと同じように『三歩の間合い』をとってから、刀を抜いた。

レフィア「三歩の間合い…… “序・交・斬”の三手で成り立つのがこの鳴神。
まずは、一手ずつ見せるね?」

私はそう言っつて、その場から体を前に倒しながら、柱の斜め前に移動した。

レフィア「これが、“序”の手」

更にそこから足を交差させて……………

妖夢「えっ？」

急激な方向転換と急加速をして、柱の真横に移動した。

レフィア「で、これが“交”。そしてここから相手を斬る“斬”の
三手。

これを完璧にこなすと……………」

私は間合いを取り直して——

ダッ………ザッ！

ズバン！！

三手全てを一連の動作として行い、土柱を叩き斬った。

レフィア「この動き、目で追えるヒトはそういないと思うよっ。」

橙「うわぁ……………」

妖夢「すごい……………」

二人とも、ポカーンとした顔で私の動きに見とれていた。

ぐうゝ………

橙「あらら………」

妖夢「ふふっ………」

レフィア「………むう／＼／＼／」

私のお腹の音が鳴り響いた……………

幽々子「そう言えば、そろそろお昼ねえ」

妖夢「では、用意しますね。レフィアも手伝って？」

レフィア「うん」

藍「私も手伝おうかな」

私と妖夢、藍さんはお昼の用意の為に台所の方に移動した。

13話 お泊まりin白玉桜〱其の動き、雷電（イカツチ）の如く〱（後書き）

恒例のスペル紹介コーナーです。

・秘剣『なるかみ鳴神』

序・交・斬の三手より成り立つ剣技。その三手故に普通の剣の業では遠すぎる三歩の間合いを必要とする。

まず、脱力による体の落下を利用した歩法で相手の斜め前方に移動する『序』の手

次に、序の手から足を交差させて、あえて不安定な姿勢をとって体を倒し、序の手とは逆方向に急転換、急加速をする『交』の手と締め括りの『斬』の三手。

“直線的”な速さなら、紫電閃の方が速いが、鳴神の速さの秘訣は相手の至近距離での“縦”から“横”への急激な体の動きに対応しきれないというヒトの視覚を利用したものだ。

当然、紫電閃以上の身体操作能力が必要となるが、その間合いに相手を捉え、鳴神を決める瞬間、その名通りヒトは雷電イカツチとなる。

次回 『お泊まりin白玉桜〜超えられない壁、胸囲の格差社会〜』

14話 お泊まりin白玉桜超えられない壁、胸囲の格差社会（前書き）

注意！！

今回は妖夢のキャラが軽く壊れてます。

それをご了承のうえで、御覧ください。

では、ごっご

14話 お泊まりin白玉桜超えられない壁、胸囲の格差社会

レフィア「ほえ……藍さん、手際良いですね」

藍「橙も手伝ってくれてるとはいえ、ウチの家事全般は私がこなしているからな。
自然と身に付いたのさ」

私達は台所でお昼ご飯の支度をしていました。

藍さんは私と話しながらも調理の手は止めてない。うん………なんだかこう、カッコいい感じがするなあ。藍さんって。

私も喋っていて止めていた手を再び動かし始めた。

レフィア「あの……藍さん？」

藍「ん、どうかしたのか？」

レフィア「尻尾、触っても良いですか？」

だって、すっごくモフモフしてそうなんだもん………

藍「別に構わないが……」

わいでは……………

レフィア「しつねいしまっす……………」

もぎゅっ

うわぁ……………やっぱりモフモフしてるっ

……………ん？

レフィア「妖夢、どうかしたの？ポーっとしちゃって」

妖夢「えっ？ぁ……………うん。べ、別に？（どうしてだろうっすっごく可愛く見える……………／／／／）」

レフィア「そう?」

藍「そろそろ、離してくれないかな? 紫様達をあまり長々と待たせておく訳にもいかないからな」

あ、いけない。

私は藍さんの尻尾から離れて、お昼ご飯の支度の続きを始めた。

で……………

レフィア「どうしよう……………？」

妖夢「三人がかりで、作業がはかどったとは言っても……………」

藍「少々、興が乗り過ぎてしまった感が否めないな」

私達の目の前には、作った料理がた~~~~くさん並んでいます。

とりあえず……………

レフィア「運びましょうか？この料理」

妖夢「そうだね」

藍「そうだな」

私達は三人で手分けして、料理を幽々子さんと紫さんが待っている部屋まで運んだ行きました。

幽々子「おおおおー！！」

紫「あらあら、幽々子ってば」

私達が料理を運んで行くと、幽々子さんが喜びを表すみたいに声を上げて、隣で紫さんが幽々子を見ながらクスクス笑ってました。

幽々子「食べてもいいわよね！？答えは聞いていないわ！！！」

妖夢「わー！！幽々子様落ち着いて！！」

藍「まあまあ妖夢、別に良いんじゃないかな？まだまだ料理はある。それに、足りなくなったらまた作れば良いだけの話さ」

橙「えっ？まだあるんですか？」

妖夢は幽々子さんを必死に抑え、藍さんは橙の隣に座った。

レフィア「じゃ、いっただきま〜す」

三分後――…

幽々子「ふう〜、ごちそうさま」

大体でだけど、二十人分位あった料理はあっという間に無くなった。
やいました。

主に、幽々子さんが食べて。

それで、今はまた縁側から庭に出て……

妖夢「はっ!!」

レフィア「やあっ!!」

妖夢から木刀を借りて、組み手をしてます。

妖夢「そこっ！」

レフィア「よつと!!」

私は妖夢が放った突きを体を捻って避け、

レフィア「お返しっ!!」

カン!!

妖夢の持っていた木刀を真上に蹴り飛ばすと――

ゴンー！

レフィア「いだっ！？」

…………それは私の頭に落ちてきた。

妖夢「レフィア、大丈夫？」

レフィア「ふえええ……………（泣）」

私は頭を抱えて、うずくまっていた状態から、妖夢を見上げた。

妖夢「……………ぐはっ!!」

バタッ……

え!?!どうして妖夢が鼻血を出しながら倒れるの?
しかも、どんどん顔色が青くなってる!!

レフィア「幽々子さん! 藍さん! 大変です!!」

私は大慌てで幽々子さん達の所まで行きました。

妖夢「……………知ってる天井だ」

レフィア「あ、目が覚めた？」

私はリンゴの皮むきをしていた手を止めて、妖夢の方に顔を向けた。

レフィア「でも、どうして妖夢がいきなり倒れちゃったの？」

妖夢「あ……………多分、疲れてたのかな……………？」

??どうして私から目を逸らして言うのかな？

妖夢「（さっきの涙で上目遣いだったレフィアが可愛すぎたから、なんて口が裂けても言えない……………！！）そ、それよりレフィアの剣術って少し変わってるよね？剣と体術を混ぜたような型だったもん」

レフィア「まあ、自己流の剣だからね。

……………よし、出来た」

私は喋りながらもリングの皮むきを続けて、食べやすいように切り分けていた。

レフィア「はい、口開けて？」

妖夢「えっ？あ…………じ、自分で食べれるから…………（今の状態で、そ

んな事をされたら出血多量（鼻血的な意味）で半人半霊じゃなくて
全身全霊になっちゃう……！！）……」

私がリンゴの一切れを指でつまんで、妖夢の口元に持っていくと、
妖夢は顔を赤くしながらそう言った。

その後も、妖夢の看病？を続けてる間に日も暮れてきて、紫さん達
が帰る頃には妖夢も元気になってました。

紫「じゃあね♪。今日は楽しかったわ」

橙「レフィア、また弾幕ごっこしようね？」

レフィア「うん」

藍「では、私達は失礼するよ」

そう言つて、紫さん達は白玉桜を後にしました。

さて………

レフィア「晩ご飯の用意、しよう？ 妖夢」

妖夢「ははっ………うん」

幽々子「ようむう、レフィアちゃん、ご飯はまだかしら？」

私と妖夢は苦笑いしながら台所に向かった。

晩ご飯の後片付けも済ませた後、私達は……

レフィア「うわぁ………」

幽々子「こういったお風呂は、初めて？」

一緒にお風呂に入ってます♪

レフィア「はい。紅魔館には、部屋ごとにお風呂がありましたけど、こんなに広いのは……………」

私は幽々子さんの質問に答えながら、湯船に体を預けた。

んゝやっぱりお風呂っていいよねゝ……………疲れが抜けてく感じが……………

ふと、妖夢の方を見ると、妖夢の視線が幽々子さんの方に向いていた。

レフィア「妖夢、どうかしたの？」

妖夢「……………」

妖夢が何も言わないので、私は妖夢の視線を目で追ってみた。

すると、その視線の先には――

湯船にぶかぶかと浮かぶ、幽々子さんの胸がありました。

レフィア「大きいなあ……………」

そう言えば紫さんや藍さん、あと美鈴さんも結構大きかったなあ……胸。

でもって、私と妖夢は………

ぺたん………

そんな音はしないけど、幽々子さんとかと比べると全くないんだよね……

レフィア「どうすれば、胸って大きくなるのかな?」

妖夢「わかんない……………」

私と妖夢の小さな溜息が浴場に静かに響き渡った……………

14話 お泊まりinn白玉桜〜超えられない壁、胸囲の格差社会〜（後書き）

次回 『お泊まりinn白玉桜〜月華美人?〜』

15話 お泊まりinn白玉桜〜月華美人?〜（前書き）

申し訳ありません。

この駄作者、更新する前に寝落ちするという愚行を犯してしまいました。

では、お泊まりinn白玉桜編最終話、始まります。

15話 お泊まりinn白玉桜〜月華美人?〜

お風呂から出た後、私は妖夢から借りた浴衣に着替えた。

妖夢「大きさ、大丈夫そうだね?」

レフィア「うん。ちょっとブカブカだけど」

私は妖夢と同じ部屋にお布団を敷いて、それから少しお喋りをしてから、眠りに就いた。

真夜中――…………

レフィア「…………むう」

目が覚めちゃった。どうしよう………

レフィア「少し、体でも動かしてこよっかな……？」

私は隣で寝ていた妖夢を起こさないように、そっとお布団から出た。

そして、持って来たカバンの中からいつものメイド服じゃなくて、袖のないハイネックの黒のインナーと黒い袴をだして、それに着替えてから枕元に置いてあった刀を腰に差して、こっそりと部屋を出た。

外に出て、空を見上げると雲は一つもなくて、綺麗な満月が静かに輝いていた。

― 妖夢 side ―

妖夢「んっ…………あれ？レフィア？」

私が夜中に目を覚まし、隣で寝ていたはずのレフィアの方を向くと、そこにはレフィアの姿はなく、

レフィアの着ていた浴衣だけが布団の上に丁寧に折り畳まれていた。

ふと、耳を澄ますと、静寂の中に微かな音を聞いた。

妖夢「これって、刀を振る音……………」

レフィア、かな？

私は部屋から出て、この音の正体を探ってみる事にした。

廊下へ出て、靴に履き替えて外に出てみるとそこには……………

レフィア「ふっ!!……………はっ!!」

一心不乱に刀を振るレフィアの姿があった。

集中しているのか、レフィアは私に気付いていないみたいだ。

レフィア「剣技……………」

レフィアは刀を地面に突き刺し、次の瞬間――

レフィア「『菊花咲閃』^{きっかしょうせん}」

レフィアの周りに山吹色の菊の花弁を彷彿とさせる弾幕が展開された。

妖夢「綺麗……………」

私はレフィアのその姿に、目を奪われていた。

レフィア「よし……………ん？妖夢、いつからいたの？」

レフィアは刀を鞘に納め、一息ついた所でようやく私に気付いたのか、私の方を向いた。

妖夢「少し前から。それより汗、流してきたら？」

レフィア「ん……そうする。」

レフィアは自分の服の匂いを嗅いでから、浴場の方へ走って行った。

十分くらい経つと、レフィアは再び浴衣に着替えて戻ってきた。

妖夢「いつも、夜中にこうやって特訓してるの？」

レフィア「ううん。今日はたまたま夜中に目が覚めちゃって、いつもなら本を読んでるんだけど、今日は持ってきてなかったから。体でも動かそうと思ってね」

私もレフィアも、縁側に座って月を眺めていた。

レフィア「わふ……………」

レフィアは目を細めて、欠伸を噛み殺した。

妖夢「さて、そろそろ寝ようか？」

レフィア「ん……………」

私は眠たそうに目を擦るレフィアを連れて、部屋に戻った。

部屋に戻ると、レフィアはそのまま自分の布団に崩れるように倒れて、寝てしまった。

妖夢「……………こんなに可愛くて、幼さの残る寝顔の女の子が、あの時、私に凄まじい殺気を向けてきた女の子と同じだなんて……………少し、未だに信じられないなあ……………」

私はレフィアの髪を優しく撫で、レフィアに薄手の毛布をかけてから、私も眠りについた。

翌日、私は身支度を整えて、白玉桜を発つことにした。

レフィア「いきなりのお願いだっなのに、泊めてもらってありがとうございました」

幽々子「気にしないでいいわよ？妖夢の友だちなら、私の友人でもあるんだからね。
友人の来訪を拒むような道理はないわよ？」

レフィア「……はいっ、じゃあ、私はこれで……バイバイ、妖夢？」

妖夢「うん♪」

幽々子さんと妖夢にお別れの挨拶を済ませて、私は紅魔館へと向かって空を飛んだ。

15話 お泊まりin白玉桜〜月華美人?〜（後書き）

〜スperl解説のお時間〜

・剣技『菊花咲閃』
きっかしゅうせん

剣を地面に突き立て、その時に発生する衝撃をレフィアの能力で周囲に展開。更にその衝撃を気弾と混ぜる事で菊の花弁のように可視化させている。

次回 『残念な美形と謎の女性』

16話 残念な美形と謎の女性（前書き）

今回はラストに謎の新キャラが！？

そんな感じの16話、始まります。

16話 残念な美形と謎の女性

白玉桜から戻った翌日、私は魔理沙の所に遊びに来ています。

レフィア「魔理沙、いる？」

ドタン！！ ガシャン！！

パリーン！！ \ウボアーノ

魔理沙「あゝ……………ん？レフィアか」

物凄い物音がしたと思ったら、頭にバンダナを巻いて、ハタキを片手に持った魔理沙がホコリまみれになって出てきた。

お掃除でもしてたのかな？

レフィア「ど、どうしたの？」

魔理沙「いや、家の掃除でもしようかと思ったんだが、如何せん物が多くてさ」

魔理沙はバンダナを取って、それで服に付いていたホコリをサッと払った。

魔理沙「それで、今日はどうしたんだ？」

レフィア「あ、暇だったから、魔理沙の家に遊びに行こうと思って」

魔理沙「うーん……茶でも出そうと思ったが、家の奥は色々やばい事になってるし……………」
よし、アイツの所にも行くか！」

レフィア「アイツ？」

魔理沙は『来ればわかるぜ』とだけ言って、箒を手にとって外に出て、空に飛び立って行った。

レフィア「あ！待ってよー！ー！」

私も魔理沙の後を追いかけるように、慌てて飛んで行きました。

魔理沙「よっし、到着」

五分くらい空を飛び、魔理沙が森の中にあつた一軒家の近くに降りたのを確認してから、私もそこに降りた。

レフィア「魔理沙、ここは？」

魔理沙「ココは香霖堂こうりんどうと言ってな。変た……悪い、噛んだ。私の昔からの知人がやってるガラクタ屋だ」

魔理沙は箒を肩に担いで、香霖堂？で良いんだよね？その扉を開けた。

中は、魔理沙の家ほどじゃないけど色々な物が転がってた。

魔理沙「よう、こーりん。冷やかに来たぜ？」

魔理沙は中に入ると開口一番にそう言った。すると、奥から背が高くて、短い銀髪の男の人が出てきた。

??「人の店に来て早々、そんな事を言うのは君くらいなものだよ？魔理沙。

ところで、そちらのお嬢さん？」

レフィア「はい？」

??「今夜、ベツ……………」

魔理沙「言わせないぜ？」

バシーン！！

??「あふん！？」

魔理沙はいきなりその人の顔を箒で思いつ切り強く叩いた。
その人はクルクル回転しながらまたお店の奥の方に飛んで行った。

魔理沙「いい加減、女性見たら見境なく口説こうとするそのクセはどうにかしたらどうなんだ？」

あと、名乗らないってのも失礼なんじゃないか？」

??「ふむ、僕とした事がうつかりしていたよ。僕はもりちかりんのすけ森近霖之助、気軽にこーりんとでも呼んでくれるかい？」

奥からでてきたその人は、簡単に自己紹介をした。

レフィア「じゃあ、こーりんさんで。私はレフィア、紅魔館でメイドをしている者です」

私も、こーりんさんに続いて自己紹介をした。

霖之助「しかし、魔理沙も酷いな。僕からこの紳士道をとつたら何が残ると言っんだい？」

魔理沙「駄目だこの変態……………早く何とかしないと……………」

レフィア「?？」

私が首を傾げていると、魔理沙が私の頭を撫でてきた。

魔理沙「レフィアは、純粋なままできてくれよ?」

— 靈夢 side —

靈夢「……………」

??「……………」

神社の近くから、妙な気配がしたから来てみれば……………誰かしら？
この女性^{ひと}は……………

??「……………た」

靈夢「ん？」

??「お腹、減っ…………た…………」

……………変に怪しんだ私がバカな気がしてきたわ。まあ……………

霊夢「行き倒れている人を平気で見捨てられる程、私は冷たくはないわ」

とりあえず、私は彼女を肩に担いで……………といつても、彼女の背丈はかなり高かったから、引きずったの方が正しいわね。とにかく、私は彼女を神社まで運んで、軽く食事を採らせてあげることにした。

【博麗神社】

??「助かった。あなたが助けてくれなきゃ多分、あのまま死んでたわ」

食事を採らせてあげたら、彼女は元気を取り戻した。
どうやら本当に空腹で倒れていたみたいね。

霊夢「どういたしまして。あと、あなたの事、少し教えてくれる?」

??「ん、いいよ?」

私は彼女からどういった経緯であそこに倒れていたのかを聞いた。

どうやら、彼女は元々は外の世界に居たらしく、そこからアイツ――

――紫に幻想郷へ連れて来られたらしい。

そして、行くあてもなく歩き回って、あそこで力尽きたみたい。

霊夢「紫め……………まゝた変な事してくれたわね……………」

??「あははは……………まあ、こっちはこっちで楽しそうだから、私は構わないんだけどね」

どうやら、彼女は生来的に環境への適応が高く、ついでに樂觀的な価値観の持ち主のようね。

私としては、取っつきやすくて良いわね。

霊夢「まあ、またどこかで行き倒れても困るから、ウチに居候でも良いから住みなさいよ？」

ただし、働かざる者食うべからず。神社の手伝いとか、人里で働いたりとかはしてもらうけどね」

??「わかった。じゃあ、お世話になるね？霊夢」

霊夢「ええ。よろしく、狐鈴^{こりん}？」

—side—

16話 残念な美形と謎の女性（後書き）

この作品の霖之助は見た目は霖之助さん（長身＋知的オーラ満載のイケメン）、ですが思考はこーりん（変態という名の紳士道を貫く漢）なお方……………

所謂黙ってれば二枚目ってやつです。

次回 『現^{うつ}より来るもの』

16・5話 現(うつつ)より来るもの

ここは、幻想郷とは違う世界——現代。

その現代にある小さな島国、日本にある一人の青年が住んでいました。

「キョウ！相変わらずよく中るな〜？」

??「はは、今日は調子が良いだけだよ。
もしかすると明日は逆で、お前の方が中るかもだぜ？」

青年の名は、白沢恭介。^{しろさわ きょうすけ}家柄が“少し”変わっている事を除けば、どこにでもいそうな弓道部に所属する高校三年生だ。

「ま、そつなるように頑張るぜ」

練習の合間に他の部員と軽く喋った後、練習を再開した。

そのまま時は流れ、道場の時計は8時を指していた

恭介「よし、今日はここまでだな」

「「「ありがとうございます!」「」」

恭介は部員達に終了の知らせをしてから制服に着替え、荷物をまとめて道場をあとにした。

恭介「さて、家に帰ったらじっさんに稽古つけてもらってから……
……アイツに借りたアニメのDVDでも見るかな」

実は恭介、結構なアニメ・ゲーム好きでよく友人からDVDやらゲームやらを借りたり自分で買ったりしているのだ。

そんなこんなで夜道を歩きながら、自宅に帰ってからする事を考えていると目の前に、一人の女性が立っているのに気づいた。

恭介「ん？アレって……………」

恭介はその女性に見覚えがあった。

そう、恭介が好きなとあるシューティングゲームのキャラクター…
……………

恭介「八雲、紫……………ウソだろ……………」

紫「いいえ？これは現。そして、貴方がこれから訪れるのは幻想の
世界」

目の前の女性——紫がそう言った途端、恭介は不意に眩暈に襲
われ……………

恭介「どう……………なっ……………て」

そのまま、意識を手放した。

【???】

恭介「ん……………ここは……………」

恭介が目を覚ますと、そこは白と黒とが入り混じる奇妙な空間だった。

紫「ここは、幻想^{ゆめ}と現実の境界の世界。

“貴女”を幻想郷^{ごうきやう}へ送る前に、幾つか話しておく事があってね」

目の前にふと現れた紫に気付いたと同時に、恭介は自分の身体に起きた異変に気がついた。

まずは髪。

恭介「あれ？こんな目が隠れる位長くなかったぞ？
っつか、色も黒から銀に変わってるし」

次は背丈。

恭介「む？少し低くなってるか？」

お次は声。

恭介「あゝ……あゝ……。うん、完璧な女声だな。強いて言うなら
田村ゆかりさん似の声だ」

最後に視線を下に落とすと――

恭介（何故胸がある！？しかも、かなり大きいな……………）

ここまでくればなにが起きたかは言わずもがな。だが恭介は一つ、目の前にいた紫に聞いてみることにした。

恭介「あのー、紫さん？あなたから見て、俺は男に見えますか？」

そして、紫から返ってきた回答は――

紫「いいえ。背の高い、大人の女性といった所かしら？
そもそも、性別の境界を弄って性別を変えたのは私だからね」

恭介「ですよ〜」

恭介の予想通りの答えだった。

紫「あら、あまり驚かないのね？」

恭介「折角の人生なんですよ？このくらいトンでもない事の一つや二つ起きる位の方が面白いですって」

紫「なかなか面白い考え方をしてるのね？気に入ったわ♪じゃあ、こっちの気まぐれに付き合わせた代わりに……………」

紫はそう言って、恭介に謎の液体が入ったビンを手渡した。

恭介「わあゝお……………」

恭介はそれをみて言葉を失った。

いや、正しく言うならビンの『液体の色』に言葉を奪われた。

恭介（何故に真っピンク？しかも透明度全くナシですかい？）

紫「それは、『想いを能力として発現させる程度の薬』。
幻想郷に^{こぼろ}来させるんだもの、何かしらの力がなければね」

恭介「あゝ、成程」

恭介はそれを聞くとビンを開け、その薬を一気に飲み干した。

恭介「うん、マズイな。コレ」

そして、頭の中で自らが望む力を想い描いた。

恭介「能力は……『魔力を操る程度の能力』」

紫「ふん。以外と普通なのね？
もう少し、欲を張ると思っていたのに」

恭介「最初っからデタラメな力があつたって、つまらないと思いま
してね」

紫「じゃあ、最後に……………」

恭介「あゝ！！！！」

突然、恭介は大声をあげた。

紫「ど、どうしたの？」

恭介「名前、どうしよう……………流石に女で『恭介』は変だし……………」

紫「あ」

恭介は腕を組んで唸りだし、紫も間の抜けた声を出した。

恭介「うゝん……………よし、決めた！」

唸っていた恭介はパツと顔をあげた。

紫「何か良い名前が見つかったの？」

紫がそう尋ねると、恭介は『まあ、即席なんでかなり適當ですけど』
と言って、左手で頭を掻きながら言葉を続けた。

恭介「今から俺は——狐鈴。
きつねいん 如月狐鈴と名乗る事にします」

紫「狐鈴……素敵な名前じゃないの？
じゃあ、さっき言いそびれたけど、最後に貴女に伝えておく事があるわ」

狐鈴（恭介）「何ですか？」

恭介——改め、狐鈴が紫の方を向くと紫は話を続けた。

紫「女性としての立ち振る舞い方よ♪」

狐鈴「あゝ……」

それを聞いて、狐鈴は納得したような声を上げた。

それから約二時間、紫から女性としての所作や言葉遣いなどのレッスンを受けさせられた。

紫「まあ、これだけやっておけばまずボロは出ないでしょうね」

狐鈴「ありがとうございました」

狐鈴はペコッと頭を下げる。

紫「さて、そろそろ幻想郷（ごんきやう）へ来てもらおうかしらね？」

紫がそう言って指を鳴らすと――

狐鈴「へ？」

狐鈴の足元が裂け、黒い空間が現れて……………

狐鈴「きゃあああ……！！？」

狐鈴はそのまま裂け目の中に落ちていった。

【幻想郷】

ヒュ
……

ゴンー！

狐鈴「いだっ！？」

暫くの間、落下を続けた狐鈴はいきなり林の中に投げ出された。

狐鈴「ここが、幻想郷……………」

狐鈴は起き上がり周囲を見回してみたが、人の気配はなかった。

狐鈴「さて、これからどう……………」

グウウ……………

狐鈴が今後の事を考えようとした矢先、狐鈴の腹が空腹の意を示した。

狐鈴「そういえば晩ご飯、食べてなかったわね……………。
よし、まずは食べられそうな物を探しながら、どこか開けた場所を

目指すことにしよう」

狐鈴はゆっくりと立ち上がり、行動を開始した。

だが……………

狐鈴「うん。完璧に迷子ね、私。」

ものの十分で道に迷ってしまった狐鈴。
しかも、ただでさえ空腹と疲労が溜まってきている時にだ。

狐鈴「あ…………ヤバ…………い…………」

バタツ……………

狐鈴はその場に力なく倒れてしまった………

16・5話 現(うつつ)より来るもの(後書き)

この後、行き倒れてるところを霊夢に拾われて16話の終わりに至
ると言っわけです。

次回 『来訪者との出会い』

オリキャラ紹介 ぱくと2（前書き）

今回はタイトル通り、新キャラである狐鈴の紹介です

オリキャラ紹介 ぱくと2

名前：如月狐鈴 きつらね こりん
本名：白沢恭介 しろさわ きょうすけ

年齢：18歳

種族：人間

性別：男↓女

身長：179cm↓173cm

体重：67kg↓不明

スリーサイズ：90 / 61 / 80

容姿：肩につく位の黒髪に黒の瞳↓銀のロングヘアに黄色の瞳

性格：楽観的で割とのほほんとしてる

能力：魔力を操る程度 of 能力

詳細：現代の日本に住む高校三年生の青年。ある日、部活の帰りに目の前に現れた女性——紫に幻想郷に連れてこられる。

幻想入りの際、紫から『思いを能力として発現させる程度の薬』なるものを貰い、それを服用して上記の能力を得た。

元々は男だったのだが、紫に性別の境界を弄られて女になってしま

う。だが、「これはこれで楽しそう」と持ち前のポジティブシンキングで開き直って新たな名前、『如月狐鈴』という名前を作る。

幻想郷に来てからは霊夢の所で居候させてもらう代わりに、神社の手伝いやら人里でアルバイトのような事をして暮らしている。

容姿としては長身のナイスバディでどこともなくクールな印象が強いが、話してみると気さくで話しやすいタイプ。

ついでに結構な方向音痴。

幻想郷や東方キャラ達についての知識も所持していたが、紫がさり気なく記憶の境界を弄ったので記憶としてはほとんど無い。

元男だが、紫からある程度女性としての立ち振る舞いや言葉遣いの指導を受けているので女性としての振る舞いも難なくこなす。

普段は怒ったりしないが、自分が友と認めた存在が侮辱されるとその怒りを露わにする。その時は口調が男に戻ってる。

実は剣術以外の武芸は一通り扱える。

と言うのも、狐鈴の家は戦乱の世より続く武芸者の家系、『如月流』と言う家で狐鈴は弱冠18にして先代当主の祖父より当主の座を渡されている。

以下、能力と如月流について

・如月流

狐鈴の“如月”姓の由来。

元々如月流は単一武芸の流派ではなく、弓術や槍術、棒術などの流派の総合体の事で、正しく言うなら如月流「劇」と、如月流の後に所属する武術名と劇を入れる。

ちなみに狐鈴は如月流弓劇だが、如月流の全劇を極めた。これは如月流創始以来初の事で、先代当主達からは“異才”と呼ばれている。当主の決定はその代の各劇長（劇ごとの長）達による話し合いによって決定される。

また、如月流の人間は皆特殊な鍛錬を積むので常人に比べて高い身体能力を持つという特徴がある。

尚、如月流の人間は日本の各地に存在しているが皆総じてその事を隠す傾向にある。

・魔力を操る程度の能力

ぶっちゃけてしまうと魔法を使う程度の能力なのだが、狐鈴の場合は魔法の根幹であるエネルギーである魔力を『三つの変換性質』を用いて魔法のように行使する。

三つはそれぞれ特有の性質を持つが、共通なのは複雑な変換はそれ相応に魔力を消費する。

魔力は使えば使う程その最大値は増えていくが一度魔力が完全に消費すると意識を保てなく（要は気絶する）なるが、一日寝れば全回復する。

・『変換性質』について

形状変換

魔力を弾や壁など、様々な形に変える性質で、最も基本の変換性質。

術式変換

術式を自在に組み、炎や氷のような属性的な変化や、回復や能力向上のような変化を術式として組ませる変換性質。

物質変換

形状変換させた魔力を一時的に物質として具現化させる変換性質。
分かり易く言うとFateのアーチャーの投影。
違いは物質化させた魔力はそのまま破棄するか、回収するか選択できる。
リリース
ドレイン

17話 来訪者との出会い（前書き）

出来ました！

感想、お待ちしております。

17話 来訪者との出会い

レフィア「面白かったね〜？ 香霖堂」

あの後、こーりんさんから色んな物を見せてもらって、その中にあった黒い布地に白のフリルがたくさんついてる可愛い洋服（ゴスロリ服ってこーりんさんが言ってた）を貰いました♪

その後、魔理沙に着てみなよと言われたから着替えたら、魔理沙はすっごく嬉しそうな顔をしてた。

それだけ似合ってるって事なのかな？

で、今は魔理沙と一緒に霊夢さんの所に遊びに行こうと森の中を歩いているの。

魔理沙「あ、ああ。そうだな……………（黒ゴス似合いすぎだぜ……………こーりんGJ！！）」

そんな中、魔理沙はさっきから私の方をチラチラと見てる……………どうしたのかな？

レフィア「魔理沙？ 私の顔に、何かついてる？」

魔理沙「はっ！？ いや、え〜と……ソ、ソレ、良く似合ってるな
〜って」

レフィア「そう？ ……ん？」

ふと、視線の先に一人の女の人が道の真ん中でキョロキョロしてる
のを見つけた。

レフィア「迷子……かな？」

魔理沙「とりあえず、話を聞いてみようぜ？」

だね。

私と魔理沙はその女の人の近くまで行って、話を聞いてみることにした。

レフィア「あの、どうかしましたか……？」

うわゝ………離れてたからわかんなかったけど、すごく背が高い人だなあゝ………

髪はきれいで長い銀髪で、前髪は右目を隠してて左目の方は横側に寄せてピンで留めていた。

目はキリツとした黄色の目で、背の高さもあってか何だかすごくクールな感じがするな………

??「ん？ ああ、丁度良かったわ」

その人は私達に気付くと、前屈みの姿勢をとって私達と同じくらいの目線の高さにした。

??「ねえ、博麗神社ってどっちの方角にあるか分かんないかな?」

え? 霊夢さんの知り合いなのかな?

魔理沙「知ってるぜ? そもそも今、そこに向かおうとしてるんだしな」

??「私もついて行っちゃダメかな? 道に迷っちゃってね?……」

女の方は笑いながらそう言った。

なんだか、見た感じとは違って明るい感じのする人だな。

魔理沙「私は構わないが……レフィアは?」

レフィア「私も、別にいいよ?」

??「ありがとう」……おっと、まだ名前を覚えてなかったわね。
私は狐鈴、如月狐鈴よ」

魔理沙「私は霧雨魔理沙。魔理沙でいいぜ」

レフィア「私は、レフィアと言います」

私と魔理沙、それに狐鈴さんと一緒に博麗神社へと向かった。

【博麗神社】

それで、神社まで来たのはいいけど……………

霊夢「方向音痴のクセに、よく一人で人里まで買い出しに行けるって言えたわね……………」

狐鈴「やゝ、今回は迷わないと思ったんだよねゝ。なんとなく」

狐鈴さんは頭にコブを三つくらい重ねた状態で霊夢さんの前に正座させられています。

霊夢さんが言うには、狐鈴さんは道に迷って倒れてるのを霊夢さんに拾われて、そのまま霊夢さんのお手伝いとかをするって条件で神社に済ませてもらってるんだって。

それで今日、人里の方におつかいに行つて欲しいって霊夢さんに頼まれて……………迷子になってたんだって。

霊夢「一体どこからその自信は出てくるのよ……」

霊夢さんが溜息を吐きながら頭を右手で抑えていると……

魔理沙「まーまー。そんな溜息ばっかついてると、幸せが逃げてくぜ？」

霊夢「でー!! アンタはアンタで人のお茶と煎餅を勝手に食べるんじゃないわよ!!」

魔理沙は『あ、やっぱ』と言いながら箸にまたがってどっかに飛んで行って……

霊夢「ちよつと!?! どうして煎餅持っていくのよ!?!」

霊夢さんも魔理沙を追いかけてどこかに行っちゃった。

レフィア「あはは……じゃあ、私も帰ろうかな？」

狐鈴「あ、その辺まで見送るよ」

残された私と狐鈴さんは立ち上がり、神社の外まで一緒に行つてから私は紅魔館に向かって空を飛んだ。

あと、紅魔館に帰ったら服が可愛くて似合ってるってお嬢様とフライン様、それに咲夜さんに誉められました♪

17話 来訪者との出会い（後書き）

次回 『とある従者な吸血鬼の一日』

18話 とある従者な吸血鬼の一日（前書き）

出来ました！

感想、お待ちしております。

18話 とある従者な吸血鬼の一日

レフィア「ふわぁ……よく寝たなぁ………」

私は大きくあくびをしながら体を伸ばした。

そして、ベッドの隣にあるテーブルの上にあった時計に手を伸ばす。

レフィア「時間は……4時、ね。うん、いつも通りだ」

ベッドから降りて、私は洗面所で顔を洗い、パジャマからいつもの黒の練習着に着替えて窓から館の外に出た。

基本、私は早寝早起きタイプ。

ちなみに同じ吸血鬼のお嬢様は遅寝遅起きで、だいたいお昼くらいまで就寝中なことが多い。

フラン様も寝るのはお嬢様と同じで遅いけど、起きる時間は結構バラバラ。早い時は私と同じくらいで、遅い時はお嬢様よりも寝ている。

で、私は朝は朝ご飯の用意の前に少し体を動かしたりしてるの。
ちなみに相手は……………

レフィア「今日もよろしくね？　土符『クレイマリオネット』」

土の性質を使つて作った泥の人形。私はそれを目の前に出現させた。
ちなみにこの人形を形作ってる土はただの土じゃなくて、気功術で
強化してあるから結構頑丈なんだよ？

あと、パチュリー様からゴーレム操作の仕組みを教えてもらってハ
ンジリツコウドウ……………だったかな？　とにかく、私の指示一つで
ある程度は勝手に動くようになってるの。

レフィア「まずは、直立状態で待機……………っと」

私は二、三步距離をとってから刀を抜かずに拳を構えた。

レフィア「体技——」

そして、人形の懷まで一気に距離を詰めて――

レフィア「『虎穿^{こせん}』――！」

ズバァァン！！！！

右掌底を腕を捻り、体重を掌の一点に集中。更に、掌底の際に掌に生成していた気弾を人形の内側で炸裂させた。

そしたら人形は見事なまでにバラバラになっちゃった……………

レフィア「うゝわ……………剣でやると、“貫く”力がとんでもない事になっちゃうから、拳でやってみただけ……………」

もつととんでもない事になっちゃった……………

私はバラバラになった人形を土に歸し（元々土なんだから、“土に歸す”で良いのかな？）てから30分くらい体を動かしてから部屋に戻ってシャワーを浴びてから、いつものメイド服に着替えた。

レフィア「うゝん、朝ご飯の仕度をするには、少し早いかな？」

コン、コン

ん？

私は部屋の扉をノックする音を聞いたので、部屋の扉を開けてみた。

レフィア「はい？」

フラン「レフィア……………」

扉を開けると、パジャマ姿のフラン様が眠たそつに目をこすりながら立っていた。

レフィア「フラン様、どうかされましたか？」

フラン「お腹、すいた〜……………」

レフィア「では、すぐに朝食の用意をしますので、お顔を洗って広間でお待ちくださいね？」

私はフラン様にそう言ってから、キッチンの方にパタパタと走っていった。

【キッチン】

レフィア「え〜っと……………卵に野菜、チーズにハム……………パンも結構あるね。
逆にお米とかは少ないかな？」

私は台座（コレがないと、調理台が高すぎて料理ができないの……）を出しながら、食材の確認をした。

レフィア「お米が少なくなると、和食や中華は無理かな？」

基本、紅魔館で出される食事は洋食だけど、たまに和食や中華料理も作ってるの。

ちなみに中華料理は美鈴さんが専門で、咲夜さんは和食と洋食を作るのが得意なんだって。中華料理も作れるらしいんだけど、美鈴さんの方が上手だって、咲夜さんが言ってた。

前に食べさせてもらったけど、どっちも美味しかったと思うんだけどなあ……………

あ、私は一応和洋中一通り作れるよ？ 得意なのはお菓子類だけど。

レフィア「パンがあるならサンドイッチにして、他にサラダでも付け合わせて……………よしっ」

朝ご飯のメニューを決めると、私は台座と一緒にテキパキと動き始めた。

【広間】

レフィア「お待ちせしました。フラン様」

だいたい20分後、私は朝ご飯を盛ったお皿をお盆にのせて広間で運んだ。

ちなみに今日のメニューはサンドイッチとポテトサラダ、それにチーズ入りのオムレツ（フラン様のお気に入り）。

フラン「わーい」レフィアのオムレツだー」

いつもの服装に着替えていたフラン様は、私の方を見て嬉しそうに声をあげていた。

レフィア「さ、どうぞ」

フラン様の座っている席の前に料理を置き、私はフラン様の隣に座って自分の分のサンドイッチに手を伸ばした。

パチュリー「あら？ 先客がいたのね」

レフィア「ふあ、ふあひゅひーふあふあ（訳：あ、パチュリー様）。……んぐっ、おはようございます」

丁度、私がサンドイッチをほおってた所にパチュリー様がやってきてしまったので、私は慌ててそれを飲み込んだ。

フラン「パチエ、おはよ」

パチュリー「ええ、おはよう。フランにレフィア」

パチュリー様は私達に挨拶を済ませると、私達の向かい側の席に座った。

レフィア「あ、パチュリー様？ サンドイッチがキッチンにまだありますけど、宜しければお持ちしましょうか？」

パチュリー「ええ、お願い。あと、紅茶もついでに淹れてきてもらえないかしら？」

レフィア「はい」

私は一度席を離れ、紅茶とサンドイッチを取りにキッチンへ戻った。

その後、朝ご飯の後片付けで食器を洗っていると――

咲夜「おはよう。レフィア」

レフィア「あ、咲夜さん♪」

咲夜さんがやって来て、食器洗いを済ませた後、少しの間おしゃべりをしてました。

咲夜「それにしても、あなたが紅魔館^{ニジ}にきて結構経つけど………初めて会った時に比べて、色々とだいぶ変わったわね？」

レフィア「……………」

私は俯いて、少し考え込んでいた。

思い返してたんだ。その言葉で、あの時の私の事を……………姉さんの事も……………。

ぽふっ

すると、咲夜さんは私の頭を撫でてきた。

咲夜「子どもの内は、そんな暗い顔をするものじゃないわよ？」

レフィア「子どもって……………私、一応18歳位なんですけど……………」

ピタッ

私がそう言つと、咲夜さんは頭を撫でていた手を止めた。

レフィア「咲夜さん？」

咲夜「……………ごめんね？ 見た目からして、もう少し幼いと思ってただけ……………」

レフィア「……いくつだと思ってたんですか？」

咲夜「9歳、10歳くらい……かしら？」

レフィア「むう……」

私がむつとして頬を膨らませてる中、咲夜さんはクスクスと笑いながらそれを見ていた。

その後、咲夜さんに頼まれた買い出しに行くように頼まれたから私は荷車を引っ張りながら人里に向かった。

【人里】

レフィア「ん〜と…………お肉やお米、野菜や調味料も買った…………と」

咲夜さんに渡されたメモを見ながら、他に買い忘れがないかを確認する。

レフィア「よし、完璧♪ そうだ、ちょっと休憩してこうかな？」

私は荷車と一緒に近くにあったお茶屋さんに向かった。

レフィア「あれ？」

お茶屋さんに着くと、その店先に見覚えのある人影を見つけた。

レフィア「狐鈴さん？」

狐鈴「え？ レフィア？」

なんと狐鈴さんが青い着物を着て立ってたの。

狐鈴「はい、お待ちどう様」

狐鈴さんはお盆の上にお茶とお団子をのせたお皿を乗せて持ってきた。

さっき聞いたんだけど狐鈴さん、霊夢さんの神社のお手伝いの他にもこうして人里でお仕事してお金を稼いでるんだって。

レフィア「あ、どうも」

狐鈴「いいのいいの、これが仕事なんだからね」

狐鈴さんは笑いながら他のお客さんの応対に行った。

私は少しの間、お茶屋でのんびりしてから紅魔館へ帰った。

【紅魔館】

紅魔館に着く頃にはちょうどお昼時だったから、私は少し急ぎ気味に買ってきた食材をキッチンに運び込んでいた。

レフィア「あ、お嬢様。お目覚めですか？」

レミリア「少し前にね。あと、買い出しご苦労様」

すると、お目覚めになったお嬢様がキッチンにやってきた。

レフィア「いえ、これが私の勤めですから。
あ、今日のお昼ご飯、何にしましょうか？」

レミリア「そうね……………たまには和食にでもしようかしらね」

レフィア「わかりました。咲夜さんにも伝えてきますね？」

レミリア「ええ。お願い」

私はお昼ご飯の準備の為に咲夜を呼びに行った。

お昼ご飯のあとは、美鈴さんといつもの日課になってる組み手をしていた。

美鈴「ふっ!!」

レフィア「はっ!!」

最初の頃は美鈴さんになかなかったけど、今は互角かそれ以上に戦えるようになった。

レフィア「よ……っ!!」

私は美鈴さんの攻撃をかくぐり、小柄な体型を活かして懐に潜り込もうとする。

美鈴「甘いっ!!」

美鈴さんは落ち着いた様子で、接近する私を蹴り飛ばそうとする。

けど……

ボロツ……

美鈴「えっ!？」

蹴りが当たった瞬間、私“だった”モノは土の塊になって崩れ去った。

そう、美鈴さんが蹴ったのはクレイマリオネットを応用して作ったダミー。

本物の私は、組み手の中で造った土壁の中に隠れていたの。

レファイア「隙ありっ!! 気符『穿蹴丸』!!」

私は土壁から飛び出し、両手で圧縮していた気弾を美鈴さん目掛け

て思い切り蹴り飛ばす。

勿論、ただ蹴ったんじゃないよ？ 蹴りの時の衝撃を倍化させて威力と速度を上げているの。

美鈴「がふっ！？」

気弾は美鈴さんのお腹の辺りに当たって、美鈴さんは7メートルくらい後ろに飛んでっちゃった。

……ちよつと、強く蹴りすぎたかなあ？

美鈴「痛たた……まさか、こんな初步的な奇襲でくるとは……」

レフィア「でも、ちゃんと不意は衝けましたよね？」

美鈴「まあね。それにしても、レフィアも強くなったね……その内、私も完璧に抜かれちゃうかもね」

美鈴さんは苦笑いしながら、私の頭をわしゃわしゃと撫でてきた。

その後、パチュリー様と魔法の勉強（魔理沙から五行環を貰ってから、ちゃんとこの力を扱えるようにパチュリー様から指導を受けるの）なんかをしてる内に、日も暮れてきました。

晩ご飯を（ちなみにカレーでした）済ませた後、私は部屋に戻ってお風呂に入ってパジャマに着替えてからベッドに横になって本を読んでいた。

レフィア「わふ……………もう11時かあ……………」

時計を見ながら大きく欠伸をしてから、私は本にしおりを挟んで閉じ、ベッドの脇にあった灯りを消した。

レフィア「明日も……………いい日になりますように……………」

そんな事を呟きながら、今日という一日を終えた。

18話 とある従者な吸血鬼の一日（後書き）

くスペル説明デスく

・体技『虎穿^{こせん}』

掌に気弾を生成、その気弾ごと腕を捻り威力と速度に体重をのせた掌底を打ち込む。

気弾は掌底の衝撃の増幅と、衝撃を対象の内側で拡散、炸裂させて外側と内側の二方からダメージを与える役割を持つ。

元々は剣の業で、突きの際に柄の端に手をあて、腕を捻りながら突く事で回転力と全体重を乗せることで突きの貫通力を高める業だが、レフィアは体術に応用した。

・土符『クレイマリオネット』

レフィアの土の性質を用いて土人形を造って使役するスペル。

半自立行動（攻撃や防御など、簡単な指示である程度オートで動作する）タイプとレフィアが完全に操作する二タイプに分けられる。

また、外見も自在に変えられるので囿や陽動にも使える。

・気符『せんしゅうがん穿蹴丸』

両手で気弾を生成、それをハンドボール程の大きさまで圧縮。それを蹴り飛ばすというシンプルなスペル。ただ蹴るのではなく、蹴りの際に生じる衝撃を倍化させることで威力と速度をあげている。

次回『二つ名を決めよう!!』

19話 二つ名を決めよう!! (前書き)

出来ました。

感想、お待ちしております。

19話 二つ名を決めよう!!

その日はお嬢様のこんな一言で始まった。

レミリア「レフィアの二つ名を考えるわよ!! 全員で!!」

珍しく早く起きたお嬢様は図書館にみんなを集めると、開口一番にそう言った。

レフィア「あの……二つ名って、何ですか？」

私がそう質問すると、お嬢様はどこかから黒板を引っ張り出してきて、そこにチョークで色々と書き始めた。

レフィア「つまり、こういう事よ!!」

黒板に字を書き終わると、お嬢様は振り返って黒板を叩いた。

なになに……？

1：二つ名とは、この幻想郷に生きる者が持つ、名前以外のもう一つの呼び名である。

2：二つ名は、その人のカリスマ度も表す。 3：うー

……うん。 3 番以外はわかった。

ん？

レフィア「と、言うことはお嬢様達にも二つ名があるんですか？」

レミリア「ええ。私なら『永遠に紅い幼き月』、フランなら『悪魔の妹』、咲夜なら『完璧で瀟洒な従者』みたいな感じにね」

おお、なんかカッコいいかも……

レミリア「ひとまず、皆でアイディアを出し合うから、レフィアは

少しの間ここから出てなさい?」

レフィア「どうしてですか?」

レミリア「お楽しみは、とっておくモノよ?

一通りアイディアが出たら、リトルに呼びに行かせるからその間、
門番の代わりでもしていてちょうだい?」

レフィア「あ、はい」私は図書館から出て、館の外に向かいました。

【少女門番中】

門の前に立って、しばらく経つと……

妖夢「こんにちは。レフィア」

妖夢が遊びに来ました。

妖夢「レフィア、何をしてるの？」

レフィア「お嬢様達が私の二つ名を決めてて、アイディアが出し終わるまでここで門番の代わりを……………」

こあ「レフィアさん、呼びに来ました……………あら？ 妖夢さんも一緒にですか？」

私と妖夢が門の前で立ち話をしていると、こあさんが私を呼びに来た。

レフィア「わかりました。妖夢も一緒に行こ？」

妖夢「えっ、いいの？」

レフィア「大丈夫ですよ？ こゑさん」

こゑ「大丈夫だと思います。一応、私からもお嬢様に伝えておきますね」

こゑさんが一足先に図書館に戻り、私達もそれに続いて図書館に向かった。

【図書館】

レミリア「待たせたわね？ レフィ……」

ガッシャーン！！！！

私達が図書館に戻り、それまで黒板の方を見ていたお嬢様が私の方を向いた時、いきなり窓ガラスが割れて――

魔理沙「よつ。遊びに来たぜ？」

魔理沙がやって来ました。

その後、お嬢様が『折角なんだから、貴女達もアイデアを出しなさい？』と言つて、魔理沙と妖夢の二人は黒板に私の二つ名の候補を書いた。

レミリア「さあ、レフィアはこの中で、どれが良いと思う？」

私は黒板の方に目を向けた。

黒板には、私の二つ名の候補が書いた人の名前と一緒に書かれてた。

え〜と……………？

・つちがね土金の従者（案：パチュリー）

・リトルヴァンパイア（案：レミリア&フラン）

・人間で従者な吸血鬼（案：咲夜）

・小さな武人（案：美鈴）

・文武兼備の吸血鬼（案：こあ）

・紅緑異彩のメイド（案：魔理沙）

・半分吸血鬼の剣士（案：妖夢）

レフィア「ん……………なんだかこう……………しっくりくるのはパチュリー様と、咲夜さんのですね」

レミリア「ふむ。じゃあ、この時からレフィアの二つ名は『つちがね土金の従者』、『人間で従者な吸血鬼』で決まりね」

魔理沙「ほ……ま、いいんじゃないか？」

妖夢「うん、私も魔理沙の意見に賛成」

レフィア「えへへ、ありがとう♪ 魔理沙、妖夢♪」

私が魔理沙と妖夢にそう言ってニコツと微笑むと――

魔理沙「ぐはっ!？」

妖夢「ぐふっ!？」

二人とも変な声を上げて倒れちゃった……………

レフィア「ふえっ！？ 妖夢、魔理沙！？」

咲夜「とりあえず、空いてる部屋まで運んで、安静にさせるわよ？」

レフィア「はいー！！」

私は咲夜さんと一緒に妖夢と魔理沙の二人を大急ぎで図書館から運び出した。

パチュリー「……………『天使の笑みを持つ者』キラースマイラーでも、悪くないわね」

レミリア「ええ……………」

19話 二つ名を決めよう!! (後書き)

次回 『狐鈴さんとトレーニング?』

20話 狐鈴さんとトレーニング？

狐鈴「ごめんね？ わざわざ付き合わせちゃって」

レフィア「いえ、気にしないで下さい」

今日は狐鈴さんに魔法の練習に付き合っただけで欲しいって言われたから、一緒に博麗神社の近くの林の中にいる。

狐鈴さん、前に霊夢さんと実戦練習して全然適わなかったらしくって、それで今度は私と練習がしたいって頼んできたの。

狐鈴「魔理沙やアリスとも一度手合わせしてるんだけど、やっぱり全然適わなかったんだよね」。

ま、おしゃべりはこの位にして……やろっか？」

狐鈴さんはそう言って軽く身構え、私も手に持っていた木刀を構えた。

さて、始める前に一応、読者様方に改めて私の能力、『魔力を操る程度の能力』の説明でもしておこうかな？

私の能力は魔法の根幹であるエネルギー、魔力を“三つの変換性質”を使って魔法みたいに使うんだ。

一つ目は『形状変換』。これが一番基本かな？
魔力に球や壁、糸みたいに何らかの形に変化させる性質。

二つ目は『術式変換』。これは魔力に火炎や凍結、電撃のような属性的な性質や傷の回復、一時的な能力上昇みたいな性質を術式として組み込むことができる性質。

三つの変換性質の中じゃ、一番魔法らしい使い方ができる変換性質ね。

三つ目は『物質変換』。これは、そうだな………某紅い弓兵の投影って言えば、解る人もいるかな？

頭の中でイメージした物体を魔力を介することで一時的に現実物質化させる性質。

ま、長つたらしい説明はおしまい！

見た感じ、レフィアは接近戦主体かな？

私が目指すのはオールレンジ対応の魔法使いだから、まずは接近戦で勝負といこうかな？

私は自分の身の丈にあった木刀をイメージし、それを物質変換で物質化させる。

ついでに、あのセリフも言っただけ。

狐鈴「トレース・オン投影開始」

レフィア「えっ！？」

お、レフィア驚いてる驚いてる。まあ、いきなり右手が水色（さつき）言い忘れてたんだけど、私の魔力は水色………というか、アクアブルー？ の色をしてるみたい）の光を纏ったと思ったら、いきなりそこから木刀が出てきたら、そりゃ驚くよね。

狐鈴「いくよ!!」

私はレフィアが驚いてる隙を衝いて一気にレフィアとの間合いを詰め、互いに木刀で打ち合う。

でも……

狐鈴（やっぱり、剣術としての技量はレフィアの方が洗練されてるね……）

剣の振りの鋭さ、全体的な動きのキレ、どれをとってもレフィアの方が上だ。

まあ、私に剣の心得が無いのもあるしね。

それじゃ、次は……

狐鈴「よっと!!」

私は脚力を強化する術式を組んだ魔法を足に掛け、バックステップでレフィアから一気に離れる。

そして、木刀を破棄^{リリース}。新たに武器を投影（コッチの方がしっくりくるから、こう呼ぶね？）する。

投影したのは黒塗りの弓……………まんまアーチャーですね。わかります。

私はその弓に魔力を棒状に形を変えて矢のようにつがえる。

狐鈴「曲射『トリックシューター』」

そして、それをレフィア目掛けて射放つ。

レフィア「このくらい……………」

レフィアは横跳びで回避を試みる。だけど……………

パン！！

レフィア「えっ……？」

矢は途中で弾けるような音と一緒に霧散して――

レフィア「くうっ！？」

レフィアの背後にいきなり現れて、それはレフィアに直撃した。

じゃあ、タネあかし。

今のは放った矢に“一定の距離を進むと一度消滅して、ターゲットの背後で再構築されてそこから相手目掛けて発射される”って術式を組んであったんだよ。

レフィア「まだまだだ！！」

んげっ！？　ボサツとしてたら間合い詰められた！

レフィア「今度はこっちの番！！　剣技……………」

レフィアは両腕を曲げて、体の前で交差させた。

あの構え……………横斬り！？　マズい、回避じゃ間に合わない！！

レフィア「『^{ぐれんせん}紅蓮旋』！！」

狐鈴「くっ！！」

私は咄嗟に魔力で壁を創り、それを盾の代わりにしてレフィアの剣を防ごうとした。

だが……………

ゴッ！！

狐鈴「嘘おっ!？」

結構魔力の密度濃くして丈夫にしたのに……………破壊、された!？

私は啞然とする間もなく、無防備だった脇腹にその剣を受けてその勢いで吹っ飛ばされた。

狐鈴「いったた……………」

あの壁が緩衝材の代わりになったのが幸いね。

多分、モロに受けたらアバラ辺りがやられてたかも。

私は起き上がって体勢を立て直そうとしたけど……………

スッ……………

レフィア「勝負あり、ですね?」

レフィアにそう言われながら、喉元に木刀を突き付けられた。

狐鈴「うえっ……まだまだ、能力が上手く扱えてないなっ……………」

私は弓を回収して、溜息を吐きながらその場に仰向けに寝転がる。

狐鈴「そうだ、わざわざ付き合わせた代わりに、面白いモノ、教えてあげるよっ」

レフィア「面白いモノ？」

私は起き上がってからレフィアを私の後ろに下がらせる。

それから、術式変換を利用して能力を術式として定着させた剣を投影する。

レフィア「わぁ……………」

それは、かのアーサー王が象徴たる剣。
手にする者に勝利を齎す輝きを持つ剣。

私はそれを構え――

狐鈴「『約束された（エクス）――』」

剣に魔力を込め、その名を高らかに叫びながら剣を振り下ろす。

狐鈴「――勝利の剣^{カリバー} アアア――！！！！」

振り下ろされた剣からは、込められていた魔力が黄金の光の斬戟となつて放たれ、おおよそ100メートルほど先の大地までをえぐつた。

……………まではよかった。

狐鈴「ヤバ……い……」

放出する魔力量の調節、忘れてた……。

おかげで今ので全魔力引っこ抜か……れ……

バタッ

レフィア「こ、狐鈴さん!？」

私は一時的な魔力切れで、気を失った。

――side――

狐鈴「ん……………」

レフィア「あ、目が覚めましたか？」

その後、私は倒れちゃった狐鈴さんを神社まで運んで、霊夢さんに事情を話して部屋で休ませてもらっていたの。

狐鈴「あ……………色々、何だか本当にごめんね？」

レフィア「いえいえ♪ それより、大丈夫なんですか？」

狐鈴「うん。魔力、一時的に全部使い切っちゃっただけだから。大人しく休んでればすぐに回復するよ」

レフィア「よかった……。それで、さっき教えたいと言っていたのって……………何だったんですか？」

私がそう聞くと、狐鈴さんは体を起こして右手を前に出して、またさっきの剣を出した。
けど……

レフィア「ボロボロ……」

さっきとは違い、刃にヒビが入っていたり、刃こぼれしていてとてもボロボロな状態だった。

狐鈴「ん……少しは魔力が回復してるとは言っても、やっぱりコレを出すには全然足りてないね……。
まあ、いいや。さっき教えたかったのは……」

パキン……

あ……

狐鈴「うわっ！？ 折れた！！？」

狐鈴さんの持っていた剣は刀身を根元の辺りだけ残して、ポツキリと折れちゃった。

狐鈴「あゝあ……とりあえず、折れた刀身だけ回収して……っと」
ドレイン

狐鈴さんがそう言って折れちゃった刀身の方に触れると、刀身は水色の霧みみたいな感じになって、狐鈴さんに吸収されちゃった。

狐鈴「よし、消えた。さっき教えたかったのはコレ……正確にはあの光の斬戟。
エクスカリバー
名を『約束された勝利の剣』」

レフィア「エクス……カリバー……」

私は狐鈴さんから、その仕組みを聞いた。

あの光は剣の刀身にエネルギーを込めて、刀身でエネルギーを増幅。それを剣の一振りと同時に解放しているみたい。

狐鈴「覚えるのはちょっと難しいかもだけどその分、火力はデカいよ？」

レフィア「仕組みとしては、私の能力と相性が良さそうですし……
…頑張ってみます」

霊夢「レフィア、ちょっといい？」

ふと、霊夢さんが部屋の襖を開けた。

レフィア「どうしたんですか？」

霊夢「神社の境内の掃除、手伝ってくれる？
お駄賃代わりに、お茶とお饅頭くらいなら出すわよ？」

レフィア「いいですよ?。」

私は霊夢さんからホウキを借りて、神社の周りのお掃除を始めた。

20話 狐鈴さんとトレーニング？（後書き）

↓ 本日のスペル説明 ↓

・ 曲射『トリックシューター』

狐鈴のスペル。相手目掛けて一直線に魔力弾を発射。相手に対して一定の距離まで近付くと魔力弾は一度消滅。相手の背後で再形成されて、背後から相手を狙うという奇襲系のスペル。

・ 剣技『紅蓮旋^{ぐれんせん}』

レフィアの技。剣を片手で持つて体の前で腕を組み、剣の持ち手を空いた方の手で弾き、横風に斬る技。

原理は『火柱』と同じだが、こちらは斬撃の方向が“縦”ではなく“横”になっているので得物の制御が難しく、『火柱』以上の身体操作能力を要する。

次回 『山菜摘みに行こう!』

21話 山菜摘みに行こう！（前書き）

できました！

感想、お待ちしております。

21話 山菜摘みに行こう！

狐鈴さんと組み手をした次の日、私は咲夜さんに『妖怪の山』って所に山菜摘みに出掛けて欲しいって頼まれたからそこに来ただけど……………

レフィア「山菜って、どれなのかな……………」

植物はたくさん生えてるけど、一体どれが食べられるのか分かんないや……………

こんな事なら、パチュリー様から植物の図鑑でも借りてくればよかったかな？

??「なあ、どうかしたのか？」

私は誰かに呼ばれたような気がして、後ろを振り向いた。

そこにいたのは、短い銀の髪にキリツとした赤い瞳。背には身長よりも長い刀を背負っていて、頭から犬みたいな耳が生えた長身の女

の人だった。

レフィア「あの……あなたは？」

??「む、すまない。まだ名乗ってはいなかったな？
私は犬走^{いぬはしり}椋^{もみじ}、この山の見回りしている者だ」

レフィア「私はレフィア、紅魔館にお仕えしているメイドです」

椋「レフィア、か。して一体どうしたのだ？」

レフィア「私、山菜摘みに来たんですけど………どれが食べられるのか、全然分かんなくて……」

私がそう言うと、椋さんは左手で頭を抱えだした。

椋「ふむ……参ったな。私はこの辺りの地理には詳しいと自負して

いるが、山菜はあまり……いや、殆ど知らないのだ。
……まで、“彼女”ならば知っているかもしれない」

レフィア「彼女？」

椀「ああ。私の友人でな、この山を流れる川の畔に居を構えているのだ。案内しよう」

タンツ！

椀さんはそれだけ言うと、近くの木の枝に飛び移った。

私もそれを追いかけるように枝に飛び移った。

【三十分くらい経過】

柊「しかし、レフィアは以外に体力があるのだな？」

私と柊さんはあれから、枝から枝へと跳んで移動してます。

レフィア「それなりに、鍛えてますからね。

柊さんも、そんな長い刀を背負って身軽に動けますね？」

柊「私も、それなりには鍛えているからな」

へえ〜…………

バキッ！！

レフィア「きゃあっ！？」

別の枝に飛び移った瞬間、枝は折れ、私は真つ逆さまに落ちていっ

た……

― 椛 side ―

しかし……レフィアは一体、どのような生き方を歩んできたと言うのだ？

私は白狼天狗。“狼”なだけあって、鼻は良く利く。だから、レフィアがこの山に入ってきた時もその“匂い”で分かったのだ。

356

それは……血の匂い。それも、長きに渡って血と死がまわり付くような世界に居続けた者が持つ、いかに拭おうにも拭えぬ血の匂いだ。

バキッ！！

椛「レフィア！！」

私は一度、考えるのをやめ、レフィアを助けに向かった。

ポフッ

レフィア「え……？」

椀「大丈夫か？」

私はレフィアを宙で抱きかかえ——言っところの『お姫様だっこ』、というものをして、そのまま地上にそっと降りた。

レフィア「あ……はい」

椀「そうか」

私は一度、レフィアを抱きかかえたまま、レフィアの姿をじっと見た。

柊「……………」

なんと細い体だ……。鍛えていると言っていただけあって、その見た目以上に筋肉がついているのは解るが……

それでも尚、血塗られし道を歩んできたきたようには到底思えぬ……。

少しでも強く抱き締めてしまえば、壊れてしまいそうな……そんな感じがする。

レフィア「あの……柊さん？」

柊「む？」

レフィア「そろそろ下ろして欲しいんですけど……。それに、そんなにじっと見られると何だか恥ずかしいです……」

柊「あ、ああ。すまないな」

私はそっと、レフィアを地上に下ろした。

柊（しかし、不思議な者だな……………）

血の匂いを身体より放ちながらも、その幼い雰囲気からだろうか？

こう……………護りたいという気持ちを感じるな。

柊「さあ、後少しだ。気をつけて行くぞ？」

レフィア「はいっ」

私は少しだけ口元に笑みを浮かべながら、レフィアにそう言った。

—side—

柊さんに助けられてから十分くらいまた木々の上を跳んで行くと、急に視界が開けて、川のそばに出た。

川の近くには小屋と、大きな洞穴があった。

柊「あそこが私の友人が住んでいる家なのだが……今日は居るか？」

私は柊さんの後について、その小屋に近付いた。

レフィア「ん？　なんだろう、この木札……」

小屋の出入り口のドアには、小さな木札がひっかけてあった。

レフィア「なにになに……？」

『ただいま色々研究中！！ ご用の人は隣の洞穴こと、“にとりんラボ”まで！！』」

椛「ふむ、やはりラボの方だったか」

私と椛さんは木札をみてから、小屋の隣にあった洞穴に向かった。

で、木札の通り、洞穴の方に来たまではいいけど……

どうして洞穴の中からキュイーンって変な音がしてるの？

レフィア「とりあえず、入ってみま………」

ガシャン！！

レフィア「えっ……？」

突然、洞穴の中から金属で出来た人形が出てきて襲いかかってきた。

柊「ふっ！！」

ザン！！

けど……

柊「大丈夫……だな？」

柊さんが刀を抜いて、その人形を真っ二つに斬った

柊「む、まだ出てくるか。」

レフィア、もう少し後ろに下がっていてくれるか？」

柊さんは洞穴から次々と出てきた人形達を見ながら刀を構えなおした。

レフィア「あ、あの……………」

柊「心配するな。私より後ろには……………
ネジの一本たりとも行かせはしない」

柊さんはそれだけ言うと、人形達に斬りかかって行き、あつという間に人形達をバラバラにしちゃった。

??「ごめんね？」 まだ、敵味方の判断をするシステムに不具合があつてね」

桜「相変わらず、お前の歓迎は手荒いな？　にとり」

桜さんが人形を壊して少しすると、洞穴から青いツインテールの女の人が出てきた。

この人が、桜さんの友だちの人なのかな？

??「で、今日はどうしたの？　また見回りサボって将棋でも指しに？」

桜「サボリとは心外な。仕事の合間の息抜きと言っているだろう？　おっと、話がそれたな。実は、聞きたいことがあってな」

??「およ？　そっちのメイドさんはどちら様かな？」

レフィア「あ、初めまして。レフィアと言います」

??「あたしは川城かわしろにとり、にとりでいいよ？　「ここで機械いじりなんかしてるんだ」

私はにとりさんと握手をかわした。

にとり「で、あたしに聞きたい事って？」

椀「ああ。レフィアが山菜の事を聞きたいらしくてな。
私も知恵を貸したいが如何せん、私も専門外でな」

にとり「弱ったな……あたしも機械なら専門なんだけど、そっ
ちはどうも……
さなえ
そくだ、早苗達なら知ってるんじゃないかな？」

レフィア「さなえ？」

にとり「この山の上に『もりや守矢神社』って神社があってね、早苗はそ
この巫女さんだよ。
ちよっと待ってな？ 簡単に地図書いてくるからさ」

にとりさんはそう言って洞穴の中からペンと紙を持ってきて、スラ

スラッとその神社までの地図を書いた。

にとり「はい」

レフィア「あ、どうもありがとうございます」

にとり「この位、お安いご用さね」

椀「気をつけてな？」

レフィア「はい」

私はにとりさんの地図を見ながら、空に上がった。

21話 山菜摘みに行こう！（後書き）

犬走さん、マジイケメン。

今回はこの一言に尽きますな。

そしてレフィアに好意を抱くメンバーが着々と増えていってますね。

次回 『常識は投げ捨てるもの』

22話 常識は投げ捨てるもの(前書き)

できました！

感想、お待ちしております。

22話 常識は投げ捨てるもの

にとりさんから受け取った地図を頼りに二十分くらい飛ぶと、山の上に建物があるのが見えた。

レフィア「あ、アレかな？」

私は建物に近付き、その傍に降りてみた。
降りてみると、白玉桜のと同じような石の階段があった。

レフィア「ん？」

ふと、階段の途中で横になって寝ている女の子がいるのを見つけた。
そうだ、あの子に聞いてみようと。

レフィア「あの………」

??「ん……………」

体をゆすつて声をかけると、その子は眠たそうに目をこすりながら起きた。

レフィア「この辺りに、守矢神社という神社があると聞いたんですけど……………」

??「ん？ 神社に用があるの？
じゃあ、ついて来て？」

あれ？ この子、神社の子なのかな？

??「あー!!」

レフィア「ど、どうしたんですか？」

??「名前、聞いてなかったよね? 私は洩矢諏訪子^{もじやすわこ}。あなたは?」

レフィア「私はレフィア、紅魔館のメイドです」

諏訪子「レフィア、ね。よろしく」

レフィア「はい」

私は諏訪子さんの笑顔に、笑顔で返してから諏訪子さんの後について、階段を登っていった。

諏訪子「さなえ〜？ 参拝客……………か、わかんないけど、お客さんだよ〜？」

一番上まで登ると、諏訪子さんは境内をお掃除をしていた緑の髪の女の人に声をかけた。

あの人が……………早苗さん？

レフィア「あの……………」

ギョーン！！

私が声をかけようとしたら、早苗さんが放った何かが私の顔の真横を通り過ぎてった。

レフィア「ど、どうかしましたか！！？」

早苗「ふふふ……………何を戸惑っているのですか？ これが、幻想郷でのあいさつですよ？」

早苗さんはニツコリと笑ってるけど、なんだか後ろに真っ黒なオー

ラが見える……………

諏訪子「あわわわわ……………」

諏訪子さんは慌てながら、地面の中に隠れちゃった。

……………どういう仕組みなのかな？

早苗「そう！！ 幻想郷ではッ！！」

早苗さんは高らかに叫びながら宙に舞い上がり――

早苗「常識に囚われてはいけないのですッッ！！！！」

両手を広げて、大量に弾幕を私に向けて放ってきた。

レフィア「ど、どうしよう……………」

避けようにも密度がかなり濃いし、壁を出して防ごうにも、弾幕の
ほうが速いし……………

それなら……………

レフィア「弾き飛ばし……………てみる!!」

私は金の性質を用いて、小振りな二本の刀を創った。

そして、向かいくる弾幕を片っ端からその刀で弾き飛ばしにかかる。

レフィア「まだまだあっ!!」

更に、私は両足に気で薄い膜を張って足も使って踊るような動きで
手数を増やす。

レフィア（……………見えた!!）

弾幕が薄くなつた瞬間を見逃さずに、私は刀を戻しながら空に飛び立ち、早苗さんに一直線に迫り猛スピードで抜刀。

その切っ先を早苗さんの喉元に突きつけた。

すると――

早苗「ようこそ、守矢神社へ」

早苗さんは再びニツコリと笑って（今度は真つ黒なオーラはなかった）そう言った。

諏訪子「へえ……レフィアって、中々やるんだね。あの弾幕をいなすなんて……」

いつの間にか地面から出て、空に上がっていた諏訪子も、驚いたような声を出していた。

早苗「私は東風谷早苗こちや さなえと言います。あなたのお名前は？」

刀を喉元に突きつけられたまま平気な顔をして話す早苗さん。

……怖くないのかな？

レフィア「レフィア。紅魔館にお仕えしているメイドです。
その……刀を喉元に当てられっぱなしで、怖くないんですか？」

早苗「言いましたでしょう？

『幻想郷では常識に囚われてはいけない』と。それに、レフィアさんからは私への敵意が感じられませんからね」

諏訪子「いや、最低限の常識は持とうよ………」

諏訪子さんが呆れ気味に言っているのを聞きながら、私は早苗さんに向けていた刀を納めた。

早苗「それで、今日はどのような用件ですか？」

あ、そうだった。

レフィア「この辺りで採れる山菜の事を聞きに来たんですけど……」

早苗「でしたら、こんな所で立ち話というのもアレですね。家の方でお話しますね？」

レフィア「あ、はい」

私は早苗さんと諏訪子さんの後について行って、早苗さんの家に上がらせてもらった。

22話 常識は投げ捨てるもの（後書き）

次回 『神様だって万能じゃないよ』

23話 神様だって万能じゃないよ(前書き)

ちよつと冬眠しました。

では、どうぞー

23話 神様だって万能じゃないよ

早苗さんのお家にお邪魔して、客間に案内されると早苗さんは「図鑑を持ってきましたね」って言って奥に行っちゃった。

??「ん? 諏訪子、そっちの子は誰だい?」

早苗さんが奥に行って少しすると、入れ違いになるように女の人が入ってきた。

あの人も背、高いなあゝ……

桜さんや狐鈴もそうだけど、どうしたらあんなに背が伸びるのかな?

レフィア「あ、お邪魔してます。私は紅魔館でメイドをしているレフィアと言います」

??「はは、そんなに硬くならなくても結構だよ。私は八坂^{やさか}神奈子^{かなこ}、その諏訪子と同じで神様だよ」

ほえゝ……………えっ?

レフィア「諏訪子さんも神様なんですか!？」

諏訪子「そーだよ? 言つてなかったっけ?

ま、幻想郷には色々な種族のヒトがいるからね、神様ごうつて言つてもそこまで威張れるようなものでもないんだよ?」

つて事は、他にも神様がいるのかな?

………ちよつと会つてみたいなあ………

早苗「レフィアさん、お待たせしました。

あ、神奈子様もこちらにいらしたんですか?」

神奈子「ああ。それで早苗、レフィアはどうして此处に? 見たところ、参拝客といった訳でもなさそうだが………」

早苗「実はかくかくしかじか………」

神奈子「成程な。……そうだ、ついと言って少しアレだがウチで昼食でも食べていけないかい？」

早苗「えっ!？」

あゝ、そう言えばそろそろお昼だっけ。

で、どうして早苗さんは「やばい!!」って感じの顔してるのかな？

早苗「あ、そうだ！ お茶でも持ってきますね。レフィアさん、ちよっと手伝ってください!!」（早口＋棒読み）」

レフィア「にゅえっ!？」

早苗さんは私の服の襟をつかむと、ものすごい勢いで外まで引っ張って行った。

レフィア「けほっ…………ど、どうしたんですか？」

早苗「実はですね……………」

早苗さんとはとても真剣な顔で話を続けた。

早苗「こう言ってしまうのもアレなんですけど……………
実は神奈子様、料理だけは恐ろしく下手なんです」

へ……………そんな風には見えないんだけどなあ……………。

レフィア「でも下手と言っても限d……………」

早苗「……前に、霊夢さんや魔理沙さんを呼んで鍋パーティーをした時に二人とも泡を吹いて気絶したことがあるんですけど……」

レフィア「……………」

私も早苗さんも少しずつ顔が青くなっていった。

早苗「だ、大丈夫ですよ！！　確かに下手ですけど日によってまちまちですし。」

それに、胃薬とかもちゃんとありますから！！」

レフィア「そ、そうですね！！」

私達は大丈夫、大丈夫と言い合いながら台所にお茶を淹れにいった。

で、いま私達の目の前には神奈子さんが作った料理があるんだけど
.....

レフィア「あの〜.....なんですか？ コレは.....」

神奈子「煮魚だが？ ああ、やはり紅魔館^{むじゅう}ではこういった和食は出ないものなのかな？」

いや、出ますけど.....

煮魚ってこんな真っ黒じゃないですし、魚から変な叫び声みたいのは聞こえませんかよね？

早苗「レフィアさん.....」

レフィア「ほえ……？」

不思議と、早苗さんが何を言いたいのか目線だけで伝わってきた。

早苗「大丈夫。大丈夫です！！ 見た目がアウトでも、食べてみると意外と美味しいって事もあるじゃないですか！！」

レフィア「そ、そうですね！！ この前霊夢さんからおすそ分けしてもらったイナゴの佃煮だつて、見た目はかなり気持ち悪かったですけど結構おいしかったですし。見た目だけで判断しちゃダメですね！！」

私は早苗さんに必死に目線を返す。

神奈子「どうした？ 冷めてしまっぞ？」

レフィア「あ、そうですね。それじゃあ、いただきます……」

私は覚悟を決めて一口、その煮魚？を食べてみた。

あれ？ 見た目ほどマズ…………——

ゆゆ様が白玉楼の縁側でひなたぼっこしながらお昼寝してる光景でも想像してまったりとお待ちください

レフィア「……………はっ!？」

早苗「ああ……目が覚めたんですね。良かった……」

気がつくと、私はお布団の上で仰向けに寝ていた。

早苗「途中から『姉さんが呼んでる……』とか、『お花畑だ……』
『とうわごとの様に言い出した時はもうダメかと……うつつ……』
……」

声のした方に顔を向けると、早苗さんは目から大粒の涙をボロボロ流してリンゴの皮むきをしていた。

388

神奈子「おお。起きていたのか」

ふと部屋のふすまが開いて、神奈子さんと諏訪子さんがカゴを背負って入ってきた。

神奈子「早苗と諏訪子から聞いたんだが……
山に登るのはこれが初めてだったのだな？ 慣れない高地で早苗の
弾幕を相手にして、疲労が溜まっていたんだろうな」

諏訪子「だから、代わりに私たちで山菜摘みに行ってきたんだよ？」

諏訪子さんは自分のカゴと神奈子さんのカゴを私の傍に置いた。

レフィア「あ……すいません……」私は上半身を起こして、カゴの中をのぞき込んだ。

うう………なんだか、まだ手足がしびれる……

レフィア「わあ………」

カゴの中には、いろんな山菜がたくさん入っていた。

諏訪子「ん、まだ動きがぎこちないかな？ 体調がよくなるまで、ここ休んできなよ？」

「アレを食べたのに、こんなに早く意識を取り戻しただけでも奇跡なんだからね」

諏訪子さんは私の方を向いて話しながら、私に早苗さんがやっていたのと同じように視線だけで語りかけてきた。

レフィア「あれ？　諏訪子さん達は平気なんですか？」

諏訪子「あっはっは」　神様を舐めてもらっちゃあいけないよ？
まあ、早苗はレフィアの看病してたから食べてないんだけどね」

………神様ってすごいんだな………。

私はそんな事を思いながら、再びお布団の上に横になって夕方まで大人しく休んでから神社を後にした。

ちなみに、その日の晩ご飯は山菜の天ぷらと咲夜さんが作った煮魚（こっちは美味しかったな……）でした。

23話 神様だって万能じゃないよ（後書き）

次回 『ブン屋、二人』

24話 プン屋、二人（前書き）

新年明けました！

今年ものんびりとやってくつもりです。

では、今回は狐鈴視点でのお話です。

24話 ブン屋、二人

やつほ、狐鈴だよ。

冒頭で誰かが言ってたけど、今回は私視点でいくんだって。

何だか少し前にも私視点为主の話があった気がするけど………まあ、メタな話はこの辺にしときましよう。

いつものように私は神社の境内を掃除していた。

最近神社の手伝いをする時は霊夢が着てるあの腋が出る巫女服を着て作業してる。

え？ どこからそんなの持ってきたのか？

それがね、霊夢がどこかで私の背丈に合わせて作ってもらったらしいのよ。

ちなみに一度試着した時に『少し胸周りがキツイ』って言ったら霊夢に思いつ切り殴られた。グーで。

狐鈴「よし……粗方済んだかな？」

私は竹ボウキを肩に担いで軽く一息ついた。

狐鈴「霊夢？ 掃除終わったよ？」

……あれ？ いつもなら『お疲れ様』って返事が聞こえるのに……
……昼寝でもしてるのかな？

狐鈴「見に行ってみよっと……」

私はホウキに魔力を込めて宙に浮かせて魔理沙みたいに跨って神社の方に飛んで行った。

狐鈴「れゝむゝ……って、お客さん？」

??「あやゝ？ 丁度良いところに！」

??「ですね、文姐あやねえ！！」

霊夢のどこまで行ってみると、霊夢は縁側で二人の女の子と話をしていた。

二人共、何だか似てるなゝ。主に頭に乗つけてる帽子とか背中の羽根とか、変わった下駄とか。

………あんなの履いてよく転ばないよねゝ。

狐鈴「霊夢、この二人組は？」

??「おおっと、自己紹介が遅れました。私は射命丸文、この幻想郷でしかないブン屋をやらせてもらってる者です」

二人組の女の子のうち、黒のショートカットの子——文と名乗った子は懷から名刺を出して私に手渡してきた。

と言うか、幻想郷にも名刺ってあったんだ……。

??「あたしは姫海棠はたて、文姐と一緒にブン屋をやってるの」

文が名乗ったのに続いて隣の茶髪のツインテールの子、はたても名乗った。

狐鈴「名を名乗られたら、こっちも名乗るのが筋ってモノね？ 私

は如月狐鈴、霊夢の所の居候よ」

文「ええ、その辺りは存じてますよ？」

狐鈴「えっ？」

霊夢「この二人、情報網は凄いからね。

そもそも、ここに来たのもアンタに話を聞きに来たからみたいだし」

私に？

文「はい」 我々が得た情報によりますと、あなたは幻想郷こゝろの外の世界から来たそうですね？」

えっ！？

狐鈴「そ、そうだけど……どこでその情報じょうほうを？」

この事知ってるの、霊夢や紫たちを除けば魔理沙やアリス、あと“あの子”くらいなのに…………

はたて「ふふん、ブン屋の情報網を見くびってもらっちゃ困るよ？」

そう言っただけなら顔をすることはたて。

確かに、すごいわね。

狐鈴「で、何が聞きたいの？ 私がわかる範囲でなら答えるわよ？」

文「それは勿論、どういった経緯でこちらに来たのか。

そして、紅魔館にお住まいのレフィアさんとの関連性はあるのか？
ですよ」

ふふん…………ま、そんな隠しとく事でもないし…………

狐鈴「いいわよ？　話してあげるわ」

私はホウキから降りて霊夢の隣に座ってから、話を始めた。

狐鈴「——とまあ、こんな所かしらね」

一通り話し終えた後（この間、文とはたては物凄い真剣な顔でメモをとってた）……………正直、所々話を作り替えたけどね。

具体的に言っと、私は外の世界で暮らしてた常人とは異なる力を持つ“女性”で、ある日目の前にいきなり現れた紫に半ば強引に幻想郷に連れてこられた——って感じにね。

レフィアの事は正直に幻想郷に来てから知り合ったと言っただけ。

文「あやゝ、成程。わざわざお時間を割いていただき、どうもありがとうございます」

メモを書き終えたのか、文は顔を上げてから頭を軽く下げた。

文「行きますよ？ はたて、次のスクープが私達を呼んでいますよ
！！」

はたて「ええ、文姐！！」

文とはたては猛スピードでどっかに飛んで行った。

……にしても速いな、魔理沙より速いんじゃないかな？

あ、名刺見て思い出したけど………

狐鈴「あの新聞、書いてたのって文達だったんだね」

霊夢「そう言えばアンタ、前に読んで腹抱えて大笑いしてたわよね？
記事じゃなくて、中の漫画読んで」

やゝ、アレは面白かったわ。今度文達にあつたら漫画のページ増や
してもらえないか頼ん……………ぷふっ、ダメだ……………思い出したら、
また……………！！

霊夢「ホラ、思い出し笑いしてる暇があるなら、ちょっと買い出し
にでも行つてきなさいよ？」

狐鈴「わ、わかった……………」「プルプル」

私は肩を震わせながら、人里まで歩いて行つた。

24話 ブン屋、二人（後書き）

この作品では、ブン屋コンビは二人で一緒に新聞を作ってるという設定です。

はたての文姐呼びは彼女なりの文への敬意の表れみたいです。

次回 『迷子のレフィア』

25話 迷子のレフィア（前書き）

のんびりでも、週一くらいの更新でいきます。

では、どつど。

25話 迷子のレフィア

咲夜さんにパチュリー様の使っているお薬が無くなっちゃったから、
『永遠亭』^{えいえんてい}って所に住んでるお薬屋さんからお薬をもらってきて欲しいって言われて、地図を頼りに来たまでは良いんだけど……

レフィア「どこ……？ っ」……」

迷子になっちゃいました……。

しかも、周りは竹がいっぱい生えててうす暗いし……

オバケとか、出ないよね……？

一度、空から見てみたけどやっぱり竹だらけだったし……。

私はビクビク怯えながら竹林の中を歩いていった。すると……

ガサッ！！

レフィア「ふえっ！？」

竹やぶの中からいきなり人が出てきて、その拍子に私は腰が抜けてその場に座りこんだ。

??「ん？ 何者だ？」

出てきたのは、青い服にうつすら青みのかかった銀色の神の女の人だった

――?? side――

私、上白沢^{かみしらさわ}慧音^{けいね}は竹林を歩いているんだが……
いつもながら、ここは竹が生い茂っていて、道がわからなくなりそ
うだな……

ガサッ！！

レフィア「ふえっ！？」

竹や木々をかき分けて進んでいくと、目の前に従者の衣装を着た少
女が現れた。

慧音「ん？ 何者だ？」

人間………にしては中に少し“混じっている”な。この感じ………
レミリアと同じ、吸血鬼か？

私が思考を巡らせていると――

レフィア「ひつぐ……ふえっ………（泣）」

いきなりその少女は泣きだしてしまった。

慧音「お、おい。どうしたんだ？　どこか怪我でもしているのか？」

慧音「ふゝむ………つまり、永遠亭に行く途中で道に迷い、一人ぼっちで不安だったところに私が現れて、それで一気に不安が爆発した、と」

レフィア「はい………／＼／＼／」

私はその少女——レフィアが落ち着くまで傍にいて、それから詳しく話を聞いた後ひとまず竹林の中にある私の家に連れて行く事にした。

ちなみにレフィアは私の左腕を両手で掴んでいる。こうしていた方が、不安も少しは晴れると思ってな。
事実、ついさっきまで泣いていたレフィアも、今は年端のいかない少女らしい豊かな表情を見せている。

寺子屋の子どもたちもだが、やはりこの位の年の子どもは無邪気に笑っている方が良いものだしな。

レフィア「あの、慧音さん？」

慧音「ん、どうした？」

レフィア「慧音さんの家って、どんな家なんですか？」

うゝむ……そうだな

慧音「二人で暮らしているが、そこまで大きな家ではないかな？
少し大きな小屋くらいの大きさだ」

私がそう言っているとレフィアは自分の中でいろいろと想像しているような表情を見せた。

レフィア「ん？ 二人？」

慧音「ああ。友人と一緒に暮らしているのさ」

――side――

レフィア「ここですか？」

慧音「そうだ。狭いかもしれないが、まあ上がってくれ」

あの後、二十分くらい竹林を歩いていくと慧音さんが言ってた通り、大きめの小屋がぼつんと建っていた。

慧音「妹紅^{もじろう}、帰ったぞ？」

玄関を開けて、慧音さんが誰かの名前を呼ぶと家の奥から銀髪の女の人が煙草をくわえて出てきた。

妹紅「おう、お帰り。慧音……って、そっちは誰だ？
まさか、人里から攫ってきたとか……」

ゴン……！！

妹紅「いだっ！！？」

慧音「私がそんな事をするわけないだろう……！」

慧音さんに頭突きされた妹紅さん（……で、良いんだよね？）は「冗談だって……」と言いながら顔をしかめて頭をおさえていた。

妹紅「ふうん、永遠亭に行く途中で迷子にねえ……
あ、まだちゃんと名乗ってなかったな？ 私は藤原妹紅、この竹林で自警団みたいな事をしてる」

慧音さんが「お茶を淹れにいつている間、茶の間で待っていてくれ」
って言ってたので、私は妹紅さんとおしゃべりをしていた。

妹紅「まあ、この辺りは昼間でもって少しばかり暗いからな。レフ
イアみたいなちびっ子が一人で歩くには、おっかないだろうな」

妹紅さんは笑いながら私の頭をわしゃわしゃと撫でてきた。

レフィア「む……私、これでも18才なんですけど……」

慧音さんもびつくりしてたけど……私ってそんなに子どもっぽく見えてるのかな？

妹紅「ははっ、色々あってこんな見た目だが私はレフィアの倍以上は生きてるからな。私からすれば、十分お子様さ」

レフィア「わわっ!？」

頬を膨らませてそっぽ向いていた私を妹紅さんはひょいと抱えて、胡座をかいていた自分の足の上に座らせた。

慧音「待たせたな。レフィア……ふふっ」

お盆の上に湯飲みを三つ載せて持ってきた慧音さんは、部屋に入ってきた途端、静かに笑いだした。

妹紅「ん？ どうしたんだ？」

慧音「いや、そうしているのを見ると、二人がまるで恋人のよう
うに思えてな」

妹紅「確かに、こんなに可愛いなら恋人にしても悪くないかもな」

レフィア「??」

妹紅さんはそう言っ
て自分の足の上に座らせていた私を後ろからぎ
ゅゅっとしてきた。

あれ？ でも恋人って、男の人と女の人同士じゃなかったかな？
こあさんが読んでた本だと、女の人同士がベッドの上で抱き合った
りキスしてたけど………

慧音「そつだ妹紅、レフィアを永遠亭まで連れて行つてくれないか？
私が行こうと思つたんだが、寺子屋の方もあつてな………」

妹紅「あいよ。元々私はそれが仕事のようなものだからな」

妹紅さんは足の上から私をどかして立ち上がった。

妹紅「それじゃ、行こうか？　レフィア」

レフィア「はい」

私は妹紅さんの後を追つて立ち上がり、慧音さん達の家をあとにした。

25話 迷子のレフィア（後書き）

こあが何を読んでいたかは聞かないお約束です。

次回 『森のウサギにご用心』

26話 森のウサギにご用心（前書き）

できました！

26話 森のウサギにご用心

妹紅「へえ……。って事は、武術の心得もあるのか？」

レフィア「はい。でも、剣技は完全に自己流なんですけど……」

私と妹紅さんは一緒に竹林を歩いて永遠亭に向かっていました。

途中で、妹紅さんが私が腰に差していた刀が気になったらしくてその話をしていた。

妹紅「私も一応素手での戦いは出来るが、妖怪が相手となるとどうしても妖術に頼りがちになるからな。そういった武芸者は正直、羨ましいよ」

妹紅さんはそう言ってまた、私の頭をわしゃわしゃと撫でてきた。

妹紅「っと……レフィア、そこ、動くなよ？」

妹紅さんは私をその場に立ち止まらせて、目の前の地面を思いつ切り踏んだ。

ガザッ！！

レファイア「えっ！？」

すると、いきなり前の茂みから複数個の泥団子が猛スピードで飛んできた。

妹紅「ふっ！！」

妹紅さんは左手に炎を燃やだし、その手で泥団子を一気に薙ぎ払った。

妹紅「毎度の事ながら、よくやるな………」

レフィア「も、妹紅さん！！　今、手……手が燃えて!？」

私が軽いパニックを起こしてあたふたしていると――

ふにつ

レフィア「ふえ………?」

妹紅「ほら、これがさっきまで燃えてた左手に思えるか？」

妹紅さんは左手の炎を消して、その左手で私のほっぺをそっと触った。

レフィア「えっと、その……………／／／／」

ううゝ……………よくわかんないけど、顔が熱くて頭がぼゝっとするゝ……………

妹紅「驚かせて悪かったな？ アレは私の妖術で創り出した炎で、私の手が燃えてるわけじゃないんだ……………
……………レフィア？」

レフィア「はにゃ……………？
はあうっ！？ そ、そう言えばさっきのは一体……………」

私は頭を左右に振ってから、妹紅さんに聞いてみた。

妹紅「ああ、永遠亭に住んでるイタズラ好きの仕業さ。
こつから先はこんなのだらけだから、気をつけて行くぞ？」

妹紅さんがそんな事を言いながら一歩、踏み出した瞬間――

ガザザザッ！！！！

妹紅「うおっ！？」

さっきの倍以上はある数の泥団子が飛んできた。

レフィア「妹紅さん、下がってください！！」

私は刀を抜いて妹紅さんの前に飛び出して、刀を横に構える。

レフィア「秘剣……………」

そして、目を閉じて意識を刀と体に集中させて…………

レフィア「『燕返し』っ!!」

普通では捉えられない速度で刀を三回振り、“三発同時”に見える
その剣閃は泥団子を一つも残さず切り捨てた。

実はこの技、あの時に狐鈴さんが教えてくれたもう一つの技なの。
「レフィアの身体能力なら、きっと役に立つ」って言うてね。

妹紅「は……………すごいな……………」

妹紅さんは私の剣をみて一言、声を漏らした。

レフィア「さあ、気を引き締めて行きましょう?」

妹紅「ははっ、これは頼もしいな」

私達は周りに気を配りながら、移動を再開した。

レフィア「はあ……はあ……。結構、多いですね……」

妹紅「今回は妙に気合入れてるな……。やたら複雑なものもあったし……。
でも、永遠亭はすぐそこだぞ？」

妹紅さんが指を指した先をよく見てみると、横長な家が少しだけ見えた。

レフィア「あ、ホント……」

ポフッ！！

レフィア「え……？」

私が一步前に踏み出した瞬間、そこにあった落とし穴が作動して私は頭から真っ逆さまに落っこちた。

??「どうよウドンゲ!! この手の罠ってのは、複雑なのをあえてふんだんに使ってからその先にシンプルなおいた方がハマるのよ!？」

??「もう……、てあつたら……。すいません、妹紅さん」

私が穴に落ちたのと同時に誰かが来たのか、嬉しそうな声と少し呆れたような声が聞こえてきた。

妹紅「おゝい、大丈夫か……………」

ボロツ……

妹紅「んげっ!?!」

妹紅さんが穴に近付いた瞬間、穴の周りの土が崩れて妹紅さんも落っこちてきた。

妹紅「く……まさかの二段形式とは……。レフィア、怪我はないか……」

レフィア「?」

穴の中で仰向けになっていた私の上に落っこちてきた妹紅さんは、両手で私の胸の辺りをおさえて完全に私の上に体ごと落ちるのを防いだんだけど……どうして顔を赤くしてるの?

妹紅「わ、悪いっ!!」

妹紅さんは大慌てで穴から飛び出し、私もそれに続いて穴から抜け出した。

??「ふっふっふ……。相手の心理すらの確に衝き、貶める。ああ……我ながら素晴らしい頭脳………」

妹紅「出来れば、その素晴らしい頭脳はもっと人様のために役立てもらいたいものだな」

さっきまで穴の中だったから分かんなかったけど、あの二人、頭からうさぎの耳が生えてる……。

可愛いなあ………

??「え」と、あなたは誰かな？」

二人のうち、妹紅さんと話していない方の女の人が、前屈みの姿勢をとって私の目線に近付けてから話しかけてきた。

レフィア「私の名前はレフィア、紅魔館にお仕えしているメイドです」

??「私は鈴仙・優曇華院・イナバ。れいせん うどんげいん長いからウドンゲって呼んでね？」

あっちは因幡いなばてゐる

ウドンゲさんはてゐさんの方を見てそう………あっ……!

レフィア「妹紅さん、左のほっぺから血が出てますよ!?!」

妹紅「ん？ ああ、本当だ。さっき穴に落ちたときにどこかで切ったか？

まあ、適当にツバでもつけとけば……………うえっ！？」

私は反射的に妹紅さんに飛びかかり、押し倒してそのほっぺから流れていた血を舌でそつと舐めとった。

レフィア（うゝん……………魔理沙や美鈴さんとも違う味だなあ。ヒトによって、やっぱり血のあじも違うのかな？）

妹紅「んなっ／＼／！？ 何してるんだ！？」

ウドンゲ「はわわわ……………／／／／」

てゐ「ウブだねえ」？ ウドンゲ」

気がついたら、妹紅さんとウドンゲさんが顔を真っ赤にしている、
てゐさんはすごいニヤニヤしてた。

どうしたのかな？

26話 森のウサギにご用心（後書き）

レフィアはパチュリーから一般的な教養は学んでいますが、恋愛面は全く学んでいないのです。

妹紅に飛びついたのは吸血鬼としての吸血衝動と解釈して頂けると幸いです。

次回 『竹林のお姫様』

27話 竹林のお姫様（前書き）

出来ました！

27話 竹林のお姫様

顔が真っ赤になった妹紅さんとウドンゲさんを引っ張って、私はてゐさんと一緒に永遠亭の中に入った。

てゐ「ただいま」

てゐさんが玄関から入ってそう言うと、奥から三角巾を頭にかぶって片手にハタキを持った長い黒髪の女の人が出てきた。

??「お帰りなさい、てゐ。

……って、どうしてウドンゲと妹紅は顔がトマトみたいになってるの？」

綺麗な人だなあ……。なんて言っただっけ？　こんな感じの人

……

あ、思い出した。

レフィア「ヤマト……ナデシコ、さん？」

??「ふふっ♪ 誉めてくれてどうも、小さくて可愛いメイドさん
」

女の方は私の前まで歩いてきて、私の頭を軽く撫でてきた。

??「私は蓬萊山輝夜^{ほうらいさんかくや}、あなたは？」

レフィア「私はレフィア、紅魔館にメイドとして仕えている者です」

てゐ「この子、お師匠に用があるみたいでさ。あたしが連れてくから、姫様はこっちの二人を空いてる部屋に連れてって休ませといてくれる？」

んん？ お姫様？

輝夜「ええ、わかったわ」

てゐ「それじゃ、レフィアはあたしについて来て？」

てゐさんは妹紅さんとウドンゲさんを輝夜さんに任せて、私を永遠亭の奥に連れて行った。

ガラッ

てゐ「お師匠？ 入るよう？」

??「もう入ってるでしょう？」

少し奥まった所にあつた部屋の引き戸を開けて、てゐさんはそう言つた。

部屋は白が基調の色合いで、ベッドが二つにいろんな液体の入つたビンがたくさん入ってる棚があつた。

??「あら、そちらは？」

部屋に居た、赤と青の二色の布地で出来た服と帽子、その上から白衣を着ていた女人が私の方を見てそう聞いてきた。

てゐ「レフィア、紅魔館のメイドなんだって」

??「紅魔館……ああ、あの子——
パチュリーの薬を貰いにきたのね？」

私はコクンと頷いた。

??「そう言えばまだ、自己紹介をしていなかったわね。
私は八意永琳^{やじりん えいりん}、永遠亭で薬屋みたいな事をしているの」

永琳さんは机の引出から一枚の紙を出して、それを見ながら戸棚からビンを取り出し始めた。

永琳「ごめんなさい？ 今から薬の調合をするから、てゐ？ レフ
イアさんを客間に案内してあげて？」

てゐ「りょくかい」

私は永琳さんに軽く頭を下げてから、てゐさんと一緒に部屋を出た。

で、てゐさんに連れられて客間に来たんだけど……………

輝夜「ヲホホホ！！　これで私の10連勝♪
今日のツキは私に來ているようね！！」

妹紅「ぬああああ！！　もう一回、もう一回だ！！」

将棋をさしながら輝夜さんは高笑いをして、妹紅さんはすっごく悔しそうにしてる……………　何があったのかな？

てゐ「まゝたあの二人は勝負してるの？」

レフィア「勝負、ですか？」

ウドンゲ「そ。二人とも、顔を合わせるとよくお互いに何かを競い合ってるの。」

“喧嘩するほど仲がいい” って言うでしょ？」

ウドンゲさんはそう言って、私を後ろから軽く抱きしめてきた。

てゐ「あれ？ ウドンゲ、あんた随分とレフィアが気に入ってるのねえ？？」

ウドンゲ「あゝ……なんだかこう、小さい子って可愛いし、守ってあげたくなるでしょう？」

ウドンゲさんは右手の人差し指で恥ずかしそうに頬をかいた。

てゐ「こんなに小さくて可愛い少女は守ってあげたくなんないの？」

ウドンゲ「って、てゐは千年は生きてるでしょうが!!」

ふえっ！？ 千年!!？

てゐ「ソナコトナイデスヨ？ ワタシ、オサナクテカワイイタダノウサギサンデスヨ」（棒読み）」

ウドンゲ「そんな顔して言っても、説得力ないわよ？」

あ、そうだった。

レフィア「ウドンゲさん？ その……さっきは驚かせてごめんなさい。

私、吸血鬼だからかわかんないんですけど……血を見ると、たまに無意識に舐めなくなっちゃうんです」

ウドンゲ「ううん、別に気にしなくてもいいよ？
さて……時間少しあるし、お菓子でも作るのかな？」

レフィア「あ、私も手伝います」

私はウドンゲさんの後を追って、台所に向かった。

輝夜「ヲホホホ！！　これで１１連勝目よ！！」

妹紅「だあゝ！！　もう一回！！
次こそは私が勝つんだ！！」

お菓子作り（作ってたのはクッキーです）が終わる頃には永琳さんの作業も終わってたらしくて、客間にいた永琳さんは私にお菓の入った袋を渡してきた。

そのあと、私たちはウドンゲさんと一緒に作ったクッキーを食べながら一緒におしゃべりをしていた。

レフィア「じゃあ、そろそろ私は帰りますね？」

永琳「ええ。気をつけてね？　あと、クッキーごちそうさま」

輝夜「今度遊びに来たときは、私が何か作るわね？」

てゐ「あたしも気合い入れてトラップ仕掛けておくよー!!」

妹紅「おい!!」

ウドンゲ「コラー!!」

てゐさんが腕を組んでそう言つと、妹紅さんとウドンゲさんの二人が同時にツツコミを入れた。

その帰り道――

レフィア「あの、妹紅さん？」

妹紅「ん？」

私は肩からかけてたバッグから小さな袋を出して、それを妹紅さんに手渡した。

レフィア「えつと……驚かせちゃったお詫び、のつもりですけど…

…」

妹紅「これ……さっきのクッキーか？」

レフィア「はい。実は、妹紅さんの分だけ別に作っておいたんです」

妹紅さんは袋の中のクッキーを見ながら何か考え込んだ後、イタズラっぽい笑みを浮かべた。

妹紅「レフィア、少しだけ口を開けてみな？」

レフィア「??」

私は妹紅さんの言うとおり、口を開けると妹紅さんはクッキーの一枚を口にくわえて――

レフィア「んうっ!!?」

それを口移しで私に食べさせた。

妹紅「私だけ驚かされっぱなしってのもアレだからな」

レフィア「ふみゆううう……??////」

なに、これえ……? 体が熱くなって、頭がぼくつとして……

パタッ………

妹紅「お、おい!! レフィア!？」

私は顔を真つ赤にしてその場に倒れた……………。

気がついた時には、紅魔館の私の部屋で仰向けに寝て（後で咲夜さんに聞いてみたら、妹紅さんがわざわざ紅魔館まで運んできてくれたみたい）いた。

27話 竹林のお姫様（後書き）

無自覚の恐怖。

次回 『鬼と天人と竜宮の使い』

28話 鬼と天人と竜宮の使い（前書き）

最近何かと多忙です……。

では、どうぞ。

28話 鬼と天人と竜宮の使い

今日はお嬢様と一緒に霊夢さんのところに遊びに来ました。

レフィア「あれ？」

神社に着くとそこには霊夢さん、狐鈴さんと魔理沙……………それと、見たことのない三人が話していました。

狐鈴「や。レフィア」

レフィア「こんにちは、狐鈴さん。あの……………どうしたんですか？ その格好」

前の時の服じゃなくて、霊夢さんとおそろいの服着てるけど……………

狐鈴「コレ？ 霊夢が『神社の手伝いの時はこれ着とけ』って言うてね。中々似合ってるでしょう？
少し、胸周りがキツ……………」

霊夢「アンタはまだそれを言うかあああ！！！！」

バチコーン！！

霊夢さんは手に持っていた紙のついた棒（あれ、何て名前なのかな？）で狐鈴さんを思いつ切り叩いて、叩かれた狐鈴さんはクルクル回りながらどこかに飛んで行っちゃった……………

？？「あいかわらず、霊夢のトコは賑やかだねえ」

霊夢「まあ……………色々面倒もあるけど、辛気くさいのよか万倍良いわよ。萃香？」

霊夢さんは隣に立っていた頭から角……なのかな？　が生えている女の子の方を見ながらそう言った。

レミリア「あら、貴女が神社こゐに出向くなんて珍しいわね。また何かつまらない騒動でも企ててるのかしらね？　天子てんし」

??「違っわよ！　ただの暇つぶしよ」

??「まあまあ、総領嬢様？　落ち着いて下さい」

魔理沙「よっ、レフィア」

レフィア「こんにちは♪　魔理沙」

萃香「お？ お前が狐鈴と霊夢が言ってたレフィアって奴かい？
私は伊吹萃香、いぶき すいか霊夢の友だちだよ」

霊夢さんの隣に立っていた女の子——萃香さんは私の方に近づいて来て、そう言った。

??「あら、貴女とは初対面……ですネ？
ながえ私は永江衣玖。竜宮の使いです。さ、総領娘様も名乗りませんと相手に失礼ですよ？」

??「い、言われなくてもわかってるわよ!!
ひなない てんし私は比那名居天子。まあ、よろしくね？」

え〜っと…… ゆつたりした感じの服装なのが衣玖さんで、帽子に桃が乗ってる方が天子さん……うん、覚えた。

レフィア「私はレフィア。見ての通り、紅魔館にお仕えしているメイドです」

霊夢「にしても、宴会でもないのに割と人が集まったわね。
萃香、アンタ能力使った？」

霊夢さんは萃香さんの方をじゅっつと見た。

萃香さんの能力って、人を集めたりするのかな？

狐鈴「折角これだけ人が集まったんだから、みんなで何かやろうよ？」

飛んでいった狐鈴さんがお尻を抑えながら戻ってきて、私達に一つ提案をした。

霊夢「そうね……………一対一で弾幕ごっこなんてどうかしら？」

霊夢さんがそう言つと、私も含めたみんなは首を縦に振つた。

萃香「よっしゃー！！　そんじゃ早速……………」

霊夢「ストップ！！　アンタは神社を吹っ飛ばす気なの！？」

萃香「じゃあ、どうするんだい？」

霊夢「じつするのよ」

霊夢さんは周りの四方向にお札を投げると、お札が光り出して私達の周りを囲うように大きな箱ができた。

萃香「なぐるほどね」

霊夢「結界張つとけば、好き放題できるでしょ？」

あ、私は結界の制御してないとダメだからパスしとくわね。で、誰が行くの？」

あ、じゃあ私……

狐鈴「はい!!」

萃香「はい!!」

……が、出てみようと思ったんだけど萃香さんと狐鈴さんが同時に手を上げた。

霊夢「わかったわ。それじゃあ、他の人は外に出るわよ？　巻き添え食らいたいなら止めはしないけどね」

霊夢さんは結界に穴を開けて、そこから狐鈴さんと萃香以外は外に出た。

— 狐鈴 s i d e —

狐鈴「そう言えば、萃香と闘るのは初めてね？」

萃香「だね。まあ、お互い手抜きとかはなるだけなしで……ねっ！
」

狐鈴「つとお！！」

萃香は先制して私に殴りかかってきたが、私は余裕の体^{てい}でよけた。

狐鈴「さて、一丁派手にやりますか！！」

私は体の前で拳を合わせて気合を入れた。

28話 鬼と天人と竜宮の使い（後書き）

次回 『拳で語れ！！狐鈴VS萃香』

29話 拳で語れ!! 狐鈴VS萃香

狐鈴「はあっ!!」

私は魔力弾を連射して数で一気に押そうとしてるんだけど……

萃香「この程度!!」

魔力弾は萃香に当たる直前に霧散する。しかも……

萃香「お返しっ!!」

その魔力を再度魔力弾に形成して撃ち返してくる!!

狐鈴「よっと!」

私は右手を魔力弾にかざしてそれを回収する。^{ドレイン}

恐らく、萃香の能力は物体やエネルギーの密度を操作する系統の能力。

……私のとは、相性悪いわね。さて、どうしたものかしら……

形状変換だけじゃ、さっきと同じなのが関の山。構築物質の根幹が私の魔力である物質変換もアウト。残るのは、術式変換だけ……
… ん？ 術式？

狐鈴（そうだ！！ …… イチかバチかだけど、試す価値はある！！）

萃香「どうしたの？ もう手詰まりかい！？」

萃香が殴りかかってきた瞬間――

萃香「およ？」

私の姿が消え、萃香に四発掌底を打ち込んだ。

狐鈴「……………あら、結構いい感じに入ったのに、ピンピンしてるのね」

萃香「まあね。それより、その腕はどうしたんだい？」

萃香は私の腕に浮かび上がっている不思議な模様と羽虫のような光を指差してそう言った。

狐鈴「呪い……………みたいなものかな？
名付けて迅呪『しんしゅライドインパルス』」

詳しく説明するなら、これは術式変換を使って体や物といった対象に定着する事で効力を発揮する術式……………呪印術に近い術式を組んでいるの。

これは定着する事で効力を発揮するという特性がある分、対象に掛かる負荷も大きいけど、効力は単純な強化よりも跳ね上がる。

さあて……………

狐鈴「反撃開始よ!!」

私は結界の中を縦横無尽に駆け、怒涛のラッシュを浴びせた。

狐鈴「くっ……………」

流石は鬼。ちよつとやさつとの攻撃じゃあ膝すら曲げないね。

まあ、この呪印は速さに特化する分一撃の威力には些か欠くからね
え……

私は一度足を止め、印を解いた。

萃香「あれ、もうお終いかい？」

狐鈴「まさか」

そして再び呪印を組む。それは、さっきの青紫色の呪印ではなく紅色の呪印。

狐鈴「剛呪『武神降ろし』」

萃香「また速いだけって手品なら、もう結構だよ？」

狐鈴「大丈夫よ。ここからは――」

私は萃香との距離を一気に詰めて――

狐鈴「ガチンコの殴り合いよ!!」

全力で殴り飛ばす。

殴られた萃香は呪印の力も相成ってか、物凄い勢いで飛んでいき、後ろの壁（結界）に叩きつけられた。

萃香「ははっ、いいねえ♪ 丁度こっちも攻撃が当たなくてイライラしてたトコなんだよ!!」

吹っ飛んでった萃香は起き上がるとニッと笑って猛スピードで突っ込んできた。

萃香「はあ……やるねえ、狐鈴？」

狐鈴「つた……」

殴り合いを挑んだまでは良いけど、やっぱりキツイ。

それは単に力の差ではなく体格^{からだ}の差。

長身の私に対して、萃香はかなり背が低い。身長差のあるもの同士の殴り合いは、背の低い側に分がある。

間合いは劣るが、小柄な体躯を利用して相手に的を絞らせにくくして巧みに相手の懐に潜り込んでボディを狙いやすいからね。

狐鈴「でも……」

まだ奥の手（とっさの思い付きだけ）がある！

私は一度離していた間合いを再び詰め、萃香を自分の間合いに置いた。

狐鈴「ねえ、萃香」

萃香「？」

狐鈴「遠くから飛んでくる魔力弾たまなら霧散させるのも簡単よね？
でも……………」

私は距離を詰める合間にこっそりと左手で生成してた魔力球を取り出す。

狐鈴「この距離で、この火力パワーなら少しは堪えるでしょ！？」

左手を魔力球ごと掌底の要領で萃香の目の前に置き――

狐鈴「魔砲『デイベインバスター』!!」

魔力球を右拳で突き、勢いをつけて放射。

アクアブルーの光が萃香を包み込む。

萃香「くぁ……いい感じに一本取られたね……。私の負けだね、こりゃ」

萃香は仰向けに寝そべってそう言った。

その直後、周囲を覆っていた結界に穴が開いた。

レミリア「鬼と真つ向からの殴り合いだなんて貴女、魔法使いにしては随分と型破りね？
でも、そうやって何食わぬ顔で無茶をやってのけるのは嫌いじゃないわよ？」

狐鈴「あはは、褒め言葉って事で良いのかな？」

開いた穴から入ってきたレミリアは開口一番にそうやってきた。

魔理沙「狐鈴！ 次は私が相手だ！
さっきの魔砲と私の魔砲、どっちが火力が^{パワー}高いか勝負だ！！」

狐鈴「っえ！？ 満身創痍……まではいかないけど、それなりに消耗してるんだけど……」

具体的に言うなら、萃香のボディーブローが結構効いて……

霊夢「消耗してなきゃ、問題ないんでしょう？」

霊夢は私の足元に別の結界を張った。すると――

狐鈴「おお？　傷と魔力が回復してる？」

霊夢「結界つてのは、ただ防御や捕縛に使っただけのモノじゃないのよ？」

魔理沙「よっしゃ！　これならイケるよな？」

狐鈴「ええ。望むところよ！！」

今度は魔理沙が結界の中に残り、
霊夢達はまた結界の外に出て行っ
た。

29話 拳で語れ!! 狐鈴VS萃香(後書き)

次回 『魔砲はパワー!! 魔理沙VS狐鈴』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4060o/>

東方従者録 ~ Little Vampire's Diary ~

2011年7月3日22時04分発行